平成２６年度

講座「丹波学」

戦国の世と丹波Ⅱ

～光秀と丹波～

（公財）兵庫丹波の森協会

丹波の森公苑

目　次

１　講座「丹波学」の開講にあたって　・・・　１

２　講座内容　・・・　２

【８月３０日】

南北朝内乱期の丹波～荻野氏を中心に～　・・・　３

関西大学　　非常勤講師　　大村　拓生　氏

【９月２０日】

国衆から見た明智光秀の丹波攻略　・・・１７

大山崎町歴史資料館　　館長　　福島　克彦　氏

【１０月２５日】

明智系図の分析　・・・２５

日本歴史学会会員、土岐会会員　　明智　憲三郎　氏

【１１月２９日】

戦乱を生き抜いた女性たち　・・・３９

静岡大学　　名誉教授　　小和田　哲男　氏

【１２月１３日】

戦国終焉の舞台　・・・４４

歴史学者　　渡邊　大門　氏

３　講師紹介　・・・５０

４　編集後記　・・・５１

１　講座「丹波学」の開講にあたって

１　丹波の森構想（丹波の森づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から５０～７０ｋｍの近郊にありながら、森林面積が約７５％を占め、豊かな自然や田園景観が残され、心のふるさとというべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特の文化を育んできました。

近年の社会情勢の変化はこの豊かな丹波の姿を急速に変えてきました。同時にそこに住む人々の心にも大きな変化を与えてきました。

こうした急激な社会変化に直面した現在こそ、新しい時代に向けて積極的に丹波の環境創造を進める丹波人の育成が必要になってきています。

このような状況で、かけがえのない美しい自然空間や、人々の営み、生活空間、生活文化、地域内外の人々の交流などを含め、「丹波の森づくり」に丹波をあげて取り組んでいます。この「丹波の森づくり」のベースになっているのが、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」です。

２　講座「丹波学」の開設

丹波の森公苑は、丹波の森づくりの拠点であるとともに、生活創造活動に必要な基本的な考えを提供し、共に考え実践する場を創造するところでもあります。

講座「丹波学」は「丹波の森宣言」の中で提起された「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を主題として平成８年に開設しました。

今年で１９回目を迎える本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域づくりを目指す地域学です。

３　平成２６年度のテーマ

平成２５年度には、戦国時代の丹波地域について「戦乱を駆け抜けた武将たち」をテーマに、荻野氏（赤井氏）、波多野氏、内藤氏の「丹波三強」はどのように形成されたか、明智光秀の丹波平定から本能寺の変までの道程、また、その時代の食文化などについて、最新の研究や情報などを織り交ぜながら学びました。

そこで、本年度（平成２６年度）は、そうした学びを引き継ぎながら、戦国の丹波をより深く追及するため、テーマを、「戦国の世と丹波Ⅱ～光秀と丹波～」とし、荻野氏を中心とした動乱期、明智光秀の丹波平定を中心とした戦乱期、そして、大坂城落城をめぐる戦国時代終焉までを中世、戦国時代の歴史研究家として著名な講師を招き、５回に渡り学んできました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私はこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1　丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
2　丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
3　丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
4　丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

２　講座内容

■ テーマ　　戦国の世と丹波～光秀と丹波～
■ 期　間　　平成２６年８月３０日（土）～平成２６年１２月１３日（土）
■ 場　所　　丹波の森公苑　多目的ルーム
■ 日　程

開催日	学習テーマ	講 師 等
平成２６年 ８月３０日 （土）	南北朝内乱期の丹波～荻野氏を中心に～	関西大学非常勤講師 大村　拓生　氏
９月２０日 （土）	国衆から見た明智光秀の丹波攻略	大山崎町歴史資料館館長 福島　克彦　氏
１０月２５日 （土）	明智系図の分析	日本歴史学会会員、 土岐会会員 明智　憲三郎　氏
１１月２９日 （土）	戦乱を生き抜いた女性たち	静岡大学名誉教授 小和田　哲男　氏
１２月１３日 （土）	戦国終焉の舞台	歴史学者 渡邊　大門　氏

第１回
南北朝内乱期の丹波～荻野氏を中心に～

関西大学非常勤講師　大村　拓生

１　はじめに

明智光秀の丹波攻略については、次回以降の先生方からお話があるかと思います。今回はもっと古い時代のことについてお話します。基本的には、鎌倉時代から南北朝、室町時代の話になりますから、だいたい１３世紀から１５世紀くらいかと思います。

それで、地名については、中世の時代ということもありますから、ずっと使われていた郡名で表記しているが氷上郡地域を拠点にしていた、明智光秀と対峙していた赤井直正がいる。赤井氏は、荻野を名乗っている勢力であります。それはなぜかということになりますと、実は室町時代までは荻野氏がその地域で最大勢力になっており、もっとも名前の売れていた名前であります。そういうことで、元々赤井という姓が戦国時代に台頭してきた勢力ですが、彼は一番いい名前をもらうということで、一時荻野を名乗っていた。

それでは、それまで最大勢力であった荻野氏とはどういう存在なのかを、お話をしていきたい。荻野氏については、まだ分からないところも多い。そんな中でもっとも活動がよく見えるのが、南北朝時代１４世紀に活躍をした荻野朝忠ということになる。この人については、歴史学的言うと非常におもしろい人である。今の倫理観から言うと「どうなの？」というところもないわけではないが、非常に複雑な動きをしている勢力である。その荻野朝忠を中心に紹介していきたい。

２　鎌倉期の荻野氏

（1）荻野氏の丹波定着

荻野という勢力は、どういう勢力なのかをまず確認していく。丹波地域は中世の領主の氏の勢力があり、鎌倉時代からの勢力であったり、戦国時代に登場してくる勢力もいる。彼らの名乗りがそのまま名字として引き継がれている事例が非常に多い地域でありまして、実は私の母親の出は京都側の綾部ですが、元々大槻という姓でありまして、その大槻という姓も戦国時代をたどれる姓である。荻野という姓もこの地域の中の方には、その名字を名乗られている方もたくさんおられるが、実は荻野という姓も元々は丹波の姓ではない。荻野氏の出自につきましては、系図類の中から取り上げた。

一、鎌倉期の荻野氏

１．荻野氏の丹波定着

荻野氏の出自：高望王―平良兼―（略）―梶原景時― 景高 ―**荻野五郎景俊**―

（細見末雄『丹波史を探る』pp17 紹介、氷上町成松蔵「荻野氏系図」）

高望王―平良茂―（略）―梶原景時―景高―**荻野二郎景貞**―（『尊卑分脈』）

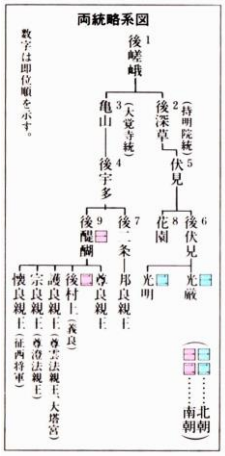
細見先生の紹介によると、氷上町成松の「荻野氏系図」というのがあるそうです。実は、探したが私自身現物を見つけることが出来ていません。だから、又聞きの引用になる。中世に出来た系図集ということで、非常に流布していた「尊卑分脈」という系図集がある。この二つの系図集の中でこういう形の系図が作られている。それで、高望王でその前を辿れば桓武天皇に至るような桓武平氏流という一流の中であるが、鎌倉幕府の成立期に活躍しました梶原景時という人がいます。彼は頼朝の側近として、非常に重要な役割を果たした人である。梶原景時は実は、頼朝が亡くなった後にすぐに反乱の疑いをかけられるという形になり、誅伐をされるということになりまして、その時に梶原景時、景高が誅伐されたということが分かる。その子どもの中で、二人は系図の中で名前は違うが上が荻野五郎景俊という名前、下が荻野二郎景貞という名前が出てきまして、その一流が丹波荻野氏になったらしいということが分かるものであります。

（地図を見ながら）ちょうどここが横浜になりまして、ここは鎌倉です。ここに下荻野という地名がある。このあたり（矢印）が中世では、荻野郷と呼ばれていた所であります。それで、どうもここが荻野という名字の発祥の地と言う形になります。ちょうど１２世紀くらいに、もともと平とか源とか氏を名乗っていた勢力が本拠の地名を名乗っていたということになる。梶原氏という勢力は、幕府によって一旦失脚するということになりますので、梶原姓から荻野姓に変わったらしいというように考えられる。その後、その荻野氏がなぜ丹波にやってきたかは、はっきりした資料は残されていないが、契機として重要だと考えられるのが１２２１年の承久の乱と言う事件であります。これにより、京都側の後鳥羽上皇が大敗することになり、実は鎌倉幕府はもともと頼朝によって作られた段階では、京都からすると鎌倉の地方政権のようなものだが、承久の乱により京都側の勢力が負け、大挙として関東の武士が西日本各地に地頭職という形で与えられることになり、移り住んできた武士がたくさんいまして、荻野氏もそういう経過を辿って丹波にやってきたと考えられる。彼の本拠地については、資料的にはっきり分かるものとしては、丹波国葛野荘という現在の氷上町の西部になる。そこの地頭に荻野五郎入道がなり、丹波が本拠になっていったと考えられる。

荻野の名前につきましては特に１３００年代になり非常にたくさん見えるようになってきます。鎌倉後期になると京都の荘園領主が自力で現地を支配することが困難になっていく状況にある。軍事力を失われていく状況、現地で事件が起きた時に警察活動を鎌倉幕府側に頼まないといけないという形になります。その結果、六波羅探題というのが京都の幕府の出張機関という形で設置がされます。京都側から六波羅探題に「何とかして欲しい」と頼みに行く、六波羅探題側は「そうすれば」という事で、六波羅探題の命令により丹波の武士、もしくは六波羅探題の直接的な奉行人という人達が派遣される。1305　多紀郡　南の篠山の方面　年貢が払わないときに派遣されたのが中沢三郎左衛門尉と沙弥忍性という武士　両使というのは二人で行くものとなっている。沙弥忍性という名前については、１３１２年　荻野四郎入道忍性という形ででてくるので荻野氏だという事が分かる。福知山側になりますが、雀部荘の乱入事件の中では荻野弥三郎入道という人がでてきます。荻野総三郎入道という人がでてきますが、実はややこしく弥三郎というのは同じ人の書き間違えの可能性がある。四郎と三郎があります。元々、長男が太郎で次男が二郎、三男が三郎。ある段階から親の名前がそのまま継がれていき、親が三郎であればその子供も三郎。この段階で荻野氏の中心にいたのは四郎と三郎であった。中沢という武士は、左衛門尉を名乗っている。左衛門尉というのは官職となる。元々からいう古代の時代に作られた官職という制度であるが、肩書を持っていればカッコいいという人々の感覚としてあり、わざわざお金を払って買っている。武士の中で左衛門尉という官職、兵衛という官職が知られている。室町時代になると武士たちが、支配している民衆たちに官職を勝手に与えてしまいその結果、江戸時代になると～衛門さん、～兵衛さんになっていく。プレミアが無くなってしまう。衛門尉というのはしっかりとした官職として評価されていた。荻野氏というのは少し格下、三郎や四郎という名前だけで官職名がでてこない。南北朝時代のある段階から格が上がり官職持ちとなる。荻野氏は２度でてくる。２度目の時に、なぜ荻野氏だけ２回目に行くという事になると彼は行きたくないと断る。六波羅両使というシステムは大きな問題がある。京都の荘園領主たちが、武士

が暴れているから武士に頼みますが、頼まれた武士が何かしたとしてもメリットがない。鎌倉幕府全体としては京都の政権を支えないといけないので、実際行動している人にはあんまりメリットがないという問題がでてくる。

（2）鎌倉幕府の倒壊と荻野朝忠の登場



鎌倉幕府の倒壊という問題に繋がっていく。京都の政権上の問題であるが承久の乱で後鳥羽天皇が流罪になり、その後次の天皇は鎌倉幕府が決める。後嵯峨という人物は、３０位で天皇になるという見通しはなかったが、他の候補者が怪我などで亡くなったという事情があり指名で天皇になった人物。息子である後深草と亀山がいますが、後嵯峨天皇は鎌倉幕府の指名で天皇になったため後嵯峨天皇自身は何も決めずに亡くなったため、皇位継承をめぐり亀山側が最初は有利であったが、後深草側が鎌倉幕府に後深草を天皇にして欲しいと運動を起こす。またこっちが巻き返す。後二条天皇が早く亡くなったため、伏見の弟の花園が天皇を継承、次に後醍醐が天皇になる。この頃になると天皇は１０年程で辞めさせるという世界になっており、次の候補者、次の候補者がでてくる事情になっていた。跡継ぎがいないのも困るが、いすぎても困る。後醍醐天皇は１０年程で辞める、その後は後伏見、後二条天皇の子供を天皇にする。「後醍醐天皇の子供は天皇にしない」という約束で天皇になった人物である。その結果、後醍醐天皇は政治に意欲的であり普通の天皇では納得いかないため、「幕府を倒そう」という計画を立てる。後醍醐天皇の周辺にはしっかりとした軍事力がない状況のため、捕まり流罪にされる。ところが、荘園領主相互の対立など色んな対決が絡み京都周辺が内乱状況なっていく。両使執行などやりたくない武士であるとか、鎌倉幕府というのは鎌倉にできた政権なので近畿地方などで力はあるが鎌倉幕府に入れてもらえなかった武士たちが独自に活動する。色んな状況が生まれてきます。当時、こういった人々は「悪党」と呼ばれていた。宮崎駿監督の「もののけ姫」でジコ坊というキャラクターがでてくるのは、この背景のままである。こういった勢力というのが、色々動き回ります。その中のひとりが播磨を拠点にした赤松円心といった人物が行う京都攻めであります。後醍醐が隠岐を脱走し、丹波の住人という事で荻野彦六朝忠の名前が見える。この人物は彦六といった名前を名のり三郎や四郎ではなく、荻野氏の中でも傍流ではないのかと考えられるが、朝忠が新しい秩序を求めていち早く立ち上がる。この時に荻野氏は京都攻めをするが失敗する。そののちに、氷上郡高山寺城に籠城する。５年ほど前に、高山寺に登った際に南北朝時代に独自のお城、山寺をそのままにお城に転用している例がたくさんある。高山寺も同様であり、寺自体は第２大戦後に移り跡だけが残っている。山の頂上からは、眺望のよい所である。そこからの風景を写真で撮りました。

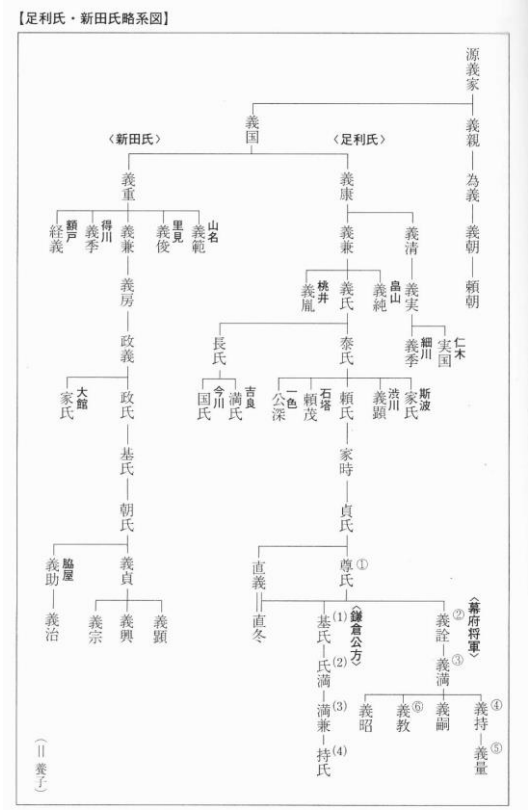
高山寺はたびたび城郭として用いられているところである。近畿地方周辺、京都周辺がぐちゃぐちゃな状況になったため鎌倉から援軍としてやってきたのが足利高氏である。足利高氏は京都で周辺の

情勢を後醍醐側と手を結び六波羅側を攻撃する。丹波の勢力の中では高氏にあっさり従ったのは久下・中沢・須知といった人たちである。一方、高山寺にこもっていたのは足立や荻野・本庄といった勢力であるが彼らは微妙に路線が違う。久下以下の人々はあっさり高氏に従う選択をする。足立や本庄は、「太平記」という書物の中では「太平記」は文学であるので全部信じられるかというのは難しいが、「太平記」の中では興味深い事が書かれています。「今更人ノ下風ニ立ツベキニ非ズ」と書かれており、今さら高氏に従うかということで、荻野以下の人々は高氏に直ぐに従うのではなく別行動をする。その状況の中で結局、鎌倉幕府は倒壊する。

３　南北朝内乱の開始と荻野朝忠

（1）　足利尊氏の挙兵

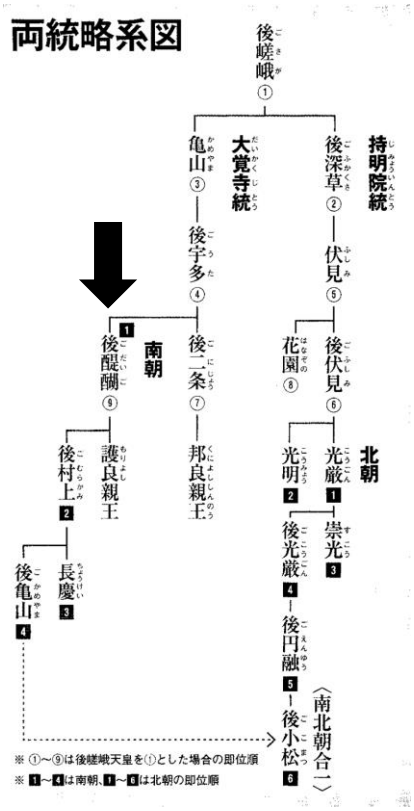
後醍醐天皇が京都に帰ってきた後に天皇中心の政策「建武新政」のかたちをとる。鎌倉時代の後半は分権的な体制であるとともに、誰が責任をとっているかよく分からない構造という体制があった。後醍醐天皇はまったく裏返した政策をとっていき、中央集権的な政策をとっていくが、全体の支持を得られず混乱を迎えていくことになる。元々、鎌倉幕府が作っていたのが守護制度、京都側には国司制度があったのですが、トップは全部天皇がまとめたが色んな諸制度がしっかりまとめる事ができないままになった。というのが後醍醐政権の構造である。新たに動き出したのが足利尊氏である。足利尊氏の“たか”という字は鎌倉幕府の倒壊により字が変わり“高”から“尊”に変わります。この名前というのは偉い人物の名前をそのまま受け継ぎます。トップの権力者が自分の名前の一字を部下たちに投げていくという構造がある。北条氏の場合は北条高時の“高”を播きます。足利尊氏の“たか”も初めは“高”を名のっていたが、鎌倉幕府が倒壊すると尊氏は後醍醐尊治の“尊”をもらい、後醍醐尊治の尊を名のることになります。尊氏は鎌倉での反乱に加勢する。１３３５年に京都を離れ独自行動をする形になる。この時に最初に尊氏方についたのが久下や波々伯部（ははかべ、もしくはほうかべ）や中沢という人たちである。丹波の篠村で尊氏方についた人達と基本的に一致しています。注意してほしいのがここには荻野氏はいない。ところが尊氏は京都を攻めるが一旦負けます。一旦負け九州に逃げ、戻ってきた際に尊氏方は足利氏が一門をばらまいていきます。足利氏というのはもともと源氏であり、鎌倉幕府をつくった源頼朝で“源義国”という人物が“足利”を最初に名のった人物である。



足利自身どんどん枝が分かれ、ここに（系図）名前がでてくる人達は足利一門である。ここにでてくるのは仁木、細川という人物がいます。足利義康の弟が新田義重と名のります。新田義重の子孫が義貞という人物である。また新田氏も枝分かれし、山名という名前がでてきます。新田義重の子供の一人に得川義季という人物は、のちのちの話にはなるが江戸幕府を作ろうとした徳川家康はこの人物の子孫だということを称することになる。おそらく嘘ですが、なんとなく源氏に繋がっていなくてはいけないと意識があり、そういった系図が作られることになった。

仁木を大将とする中に久下・中沢・荻野と波々伯

部がでてきます。荻野というのは１３３５年の段階では、ここに名前がでてこない。それに対して１３３６年２月段階になるとここに初めて名前がでてくる。最初は尊氏の反乱に従わなかったが、尊氏方が勝ちそうだという事で尊氏方の味方をしようという話になる。荻野と行動を一緒にしていた足立さんという人物がいますが足立さんというのは後醍醐方で動いていく勢力である。荻野氏というのは、その辺の情勢を見るのが好きな人物である。結果、地域の合戦が始まる。一番この地域の中で早いのが山南町の井原岩屋の石龕寺というお寺があり、その近くに仁木が軍勢を集める。そのおかげで丹波での内乱が始まっていく事になります。当時の暦は太陰太陽暦という暦であり、月を見れば今日が何日かわかり１５日が満月になるようにセッティングされています。この太陰太陽暦は太陽暦とは合いません。農業をやるときには太陽暦が必要ですので、太陽暦と合わせるため日本の暦というのは、江戸時代まで１９年７回１３か月ということで強引に太陽暦と合わせるということが行われています。明治時代になると現代の暦に法制度上に変わる。お盆というのはかつて７月１５日に行われていましたが、現代はひと月ずらしで行われている地域が多いが七夕という行事は７月７日という数字にこだわってしまった結果、最も日本で星の見えない時期にやるという事になってしまった行事である。七夕はもともと季節感からいうと８月の前半の季節感である２０１４年のように台風がくるみたいな事がないわけではないが普通であれば星が見える時期である。何月何日といった時に今の暦と昔の暦が違うという事を確認しておいてください。ここに取り上げているのはかつての暦の日付、５月になり湊川合戦で足利尊氏が新田義貞を破る。



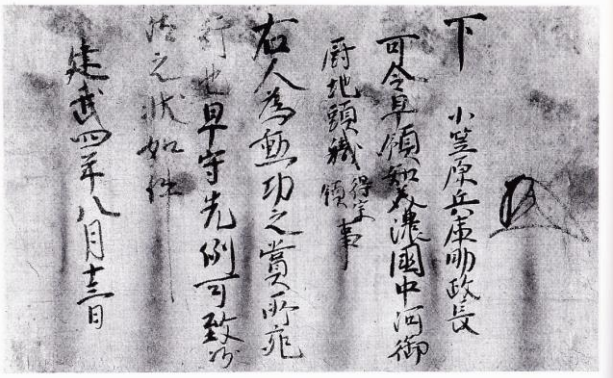
その後、尊氏は後醍醐から神器をもらうという形になります。鎌倉時代の後半から天皇家は分裂していたので、こっち側の天皇家はいる。足利方はこっち側（矢印）の天皇と結びつくという形になります。対する側が一般的に北朝と呼ばれている勢力であります。後醍醐方も自分こそが正当な天皇だと主張し、逃げるという形になりこちらを南朝と呼んでいるものです。足利尊氏も幕府を立てる「建武式目」というのを宣言する。京都側に足利氏の政権ができる。後醍醐方の勢力は丹波の新田一門の江田行義のもと足立・本庄といった人たちが後醍醐方で活躍をしていた。

（２） 荻野朝忠の行動と寺社本所領

鎌倉時代の後半に最初に幕府体制から離脱した荻野、足立と本庄。そのうち荻野は途中から幕府側につくが足立や本庄は後醍醐側の勢力で活動する。その後、荻野氏は１３３７年５月栗村河原、７月に土師河原、由良川の河原あたりが戦場になっていく。合戦があり丹波で大規模の戦争が起こり、その後に和久城の攻防戦もある。後醍醐方の勢力と足利方の

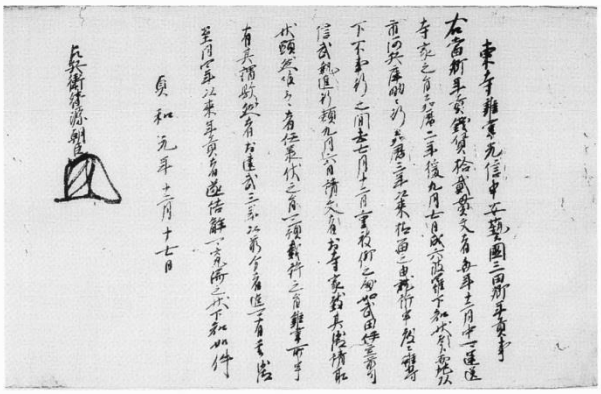
勢力の攻防戦というのが、たびたび行われていた。荻野氏はそういった所で活躍をするが、その一方で独自の行動を行っていきます。何故かというと赤松という勢力がおり、春日部荘（旧春日町）の地頭をもらったが荻野一族が妨害している。荻野一族　丹波国一宮（亀岡）で荻野彦六の被官が妨害する。荻野源太左衛門が横領している。などあちらこちらで土地の横領をしているのが分かる。荻野氏は和久城合戦で久下氏の軍功を確認するという形で合戦の中でも重要な役割を果たしている一方で、あちらこちらで土地が盗られている事が荘園領主側の記録ではでてきます。１３４３年に朝忠自身が離反をするということになります。現在、篠山市側にある波々伯部というところにつきまして、荻野源太、荻野彦六というのが敵になった。波々伯部というのは京都にある八坂神社（祇園社）の土地になっていた所である。そこで荻野氏は敵方に寝返ったと京都側に言われます。実は大規模な事件になり、もともと足利方の軍事機関と仁木自身が辞めないといけない形でなってしまい、荻野の軍事力は仁木の元で重要な役割を果たしていたことを示している。新たに山名時氏が任命されなおすという事になり、荻野氏は高山寺にこもりますが、「太平記」の中で「食攻」ででてきます。いわゆる封鎖作戦をし、降伏したらしいというのが分かる。割とあっさりと決着がついているという事が分かり、荻野氏は足利氏の味方につけば自分の支配する土地を増やせると思っていた。ところが足利氏は京都に新たに政権を作ります。そうすると京都にお寺さんや色んな人達に配慮しないといけないという事になり、土地をとるような武士では駄目だという話になり、鎌倉時代の後半からずっとあった問題で当時の社会の中ではお寺や神社の敬意というのは非常に高い。天皇については生身の天皇については色々とあるが、天皇については非常に偉い人である。その廻りの公家というのも非常に偉い人たちなので、彼らの持っている土地を盗ってはいけないと儀礼上そうなっている建前がありますが、それと武士の行動は中々合わないという問題が出てくる。荻野氏も朝忠も軍事行動すれば自分の土地が増えると思っていたがそれが上手くいかないという事に対して、そうしたら幕府から離反する事があった状況が分かる。大正時代にできた「氷上郡誌」という本があり、そこに荻野尾張権守という人物が葛野荘をもらったという事について南朝文書にある。元号では足利氏は建武という元号をある段階まで続けますが、後醍醐方はあっさりと改元というかたちで元号を変えます。元号というのは王が決めてつくるものですので、その後も元号を両勢力が勝手に変えていきます。歴史を勉強するときに便利かというと結果、何年と書いてあれば、どちらの勢力がだしたものかすぐ分かる。荻野尾張権守という人物にあてた元号というのは、南朝方がだしたものだと元号からわかります。「氷上郡誌」の本の中に活字として掲載されているだけで現物がどういったものかというのはさっぱり分からないのですが、尾張権守に葛野荘を与えたことが出てきます。こういった文書が、何故重要かというと実は荻野氏というのは「～守」と名乗ります。尾張というのは、エビフライの名古屋の尾張になりますがこの人は尾張と関係は無かったが「～守」というのは国の長という意味。格としては非常に高い格になり、荻野氏というのはこの段階では「彦六」という通称名でしかでてこないが、この段階で初めて荻野尾張権守と名乗る。この段階で格が上がっているというのが分かるものであります。その後、荻野氏は足利方に戻りますが荻野尾張守と出てきます。尾張守にどうやってなったかというのが重要だが、現物が不明なのでよくわかっていない。荻野朝忠というのがある段階までは幕府側についていたが、あっさり鎌倉幕府を見限って後醍醐方につく、ところが後醍醐方が負けそうだなと思ったら、今度は幕府につく。ところが幕府の中ではあまり行動が上手くいかないと思ったら、また南朝方に流れてところがもう一度あっさり幕府方に復帰をする。京都の勢力の間でどういった関係を結ぶかと政治じたいが決まっていないという大きな問題である。幕府自体がそういった体制自体がそういった問題を抱えています。足利氏というのは初期の段階で足利尊氏、弟の直義の兄弟で政治をやっています。尊氏のやることは武士を統率する役目を果たしています。それに対して直

義というのは、京都の勢力との調整役をしている。



25　足利尊氏袖判下文〔小笠原文書／東京大学史料編纂所所蔵〕131頁

これが尊氏のサインの文書。尊氏が小笠原という武士に対して、戦争に頑張ったから土地をあげるという文書。それに対して足利直義のサインのあるもの京都に東寺というお寺がありますが、そこのお寺さんが武士に土地を盗られたから何とかしてほしいという事に対して、直義がわかったという文書である。



31　足利直義下知状〔東寺百合文書マ函／京都府立総合資料館所蔵〕295頁

この時代は先例が大事なので京都のお寺さんが持っていた土地なので先例をもちだしたら、どちらが勝つかというとお寺さんが勝つというしくみになっている。

神護寺蔵「伝源頼朝像」（足利直義）　　同「伝平重盛像」（足利尊氏）

京都の神護寺に肖像画が三枚納められています。その中で最も有名なのがこれ源頼朝像、学校の教科書にも載っているものである。これについては近年、違う説がでてきたということについては割とテレビなので少し紹介されることになっているのでご存じの方もいらっしゃるかとは思います。実はこの２枚はセットだということ、顔立ちをみても非常に似ている、左が源頼朝、右が平重盛となっているのですが赤の他人では絶対にないと言われている。文章が残っていて足利直義が自分と頼朝の像を神護寺に納めたという文書が残されている。消去法ですが、現代ではこれが足利尊氏像で、足利直義像だということが一般で言われる。直義と尊氏というのはお母さんが一緒の実の兄弟、兄弟というのはお母さんが違うという兄弟、源頼朝や義経というのは子供のころは一度も会ったことのない兄弟である。尊氏、直義はお母さんも一緒でずっと一緒に育ってきた兄弟であり、仲の良いエピソードが非常にたくさん伝わってきている。両方がふたりで政治をしていく。彼らがとっていく政治方針というのは少しずつ合わなくなっていく、戦争を進めるのがいいのか京都の政権を安定させるのがいいのかという点で大きな矛盾がでてくる。

４　観応の擾乱

（1）荻野朝忠の守護職権行使

尊氏派と直義派が大分裂を招くというのは１３５０年の事態である。これが観応の擾乱と呼ばれているものである。１０月に直義派が挙兵をする、尊

氏・義詮が京都を追われる事になります。義詮というのは尊氏の子供でありますが、義詮は山南町の石龕寺に逃げた。この際に荻野・波々伯部・久下・長沢（中沢）といった武士たちから支援を受けた。義詮方の軍勢として荻野氏以下の人々が活動する。戦時情勢というのは尊氏と直義は一旦和議をするが直義が最終的に北陸に没落します。仁木のあとに守護になっていた丹波守護の山名時氏も直義派として行動することになります。尊氏はその後、鎌倉の直義追討に向かう。尊氏と一緒にいた仁木。丹波のトップはもともと仁木がトップになっていてその後、山名が入って山名がいなくなったあと仁木が戻る。１３５１年１１月段階から丹波の守護はいなくなる。勝手に守護をやりだしたのが荻野氏である。荻野氏は丹波で南朝方の軍勢と戦う、直義派というのは南朝方と結びつき南朝方が復活をしてくる状況になる。１年１３か月と話したが、普通の数字で書いたら普通の月で〇と書いたら閏月。閏２月の１５日に、京都の「丹波国守護荻野」が追い落とされる。南朝方勢力が京都に侵攻する。足利義詮が京都奪還を果たし、その後保津、和久、そしてもう一度押し返す状況になる。

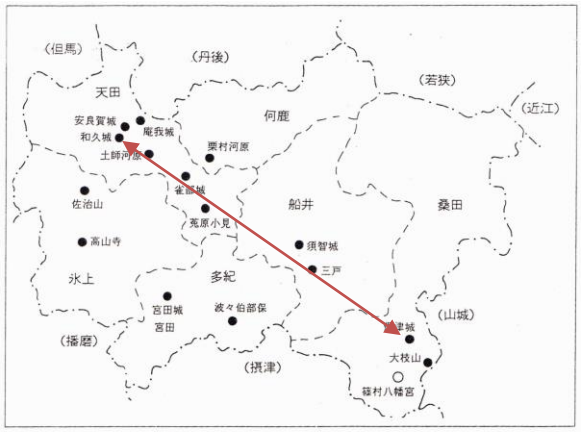
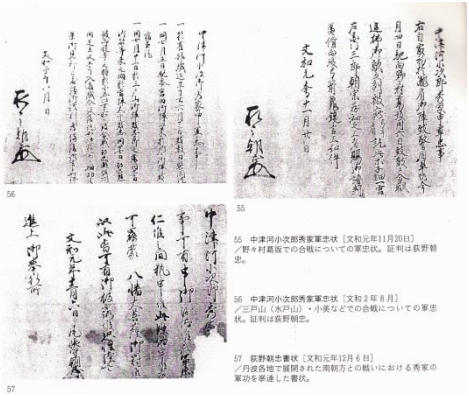


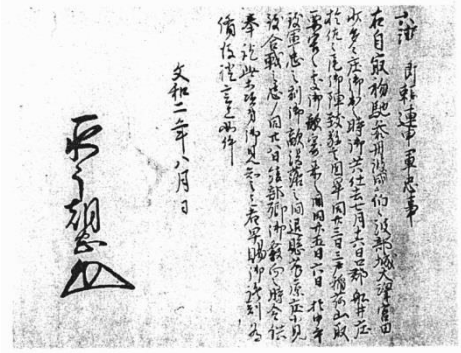
図 2　　丹波合戦地等推定位置図

高山寺の犬山で合戦が行われているので、このラインで合戦が行われている状況が分かる。南朝方勢力がこっち側から追い落としをはかり、またこちら側から反撃に行くという構造になっている。こういった合戦がたびたび繰り返される。その中で足利方の軍事指揮官になっていた荻野朝忠である。その間も、あちらこちらで土地を盗って問題にされる。南丹市や篠山などで荻野が土地を盗ったと問題になります。丹波は京都から近いので、京都の領主からすると丹波あたりの土地を盗られるとやっていけない状況である。九州や関東の土地はほとんど失われてしまっているので、近場のところは確保しておきたい。荻野氏はそういうところを何度も押領する。朝忠というのは石龕寺から義詮から「かすめ賜ったのだ」、丹後でも義詮の「奇破御下文」を根拠に横領していた。義詮は戦争に負けそうになったら「とにかく土地を盗っても何してもいい」と文書をだしていた。３、４年たち戦争に勝つと今度は京都の諸勢力からここの土地を盗られたが何とかして欲しいと言われ、その時に義詮側が「奇破」という形でこの時の間違いでしたといった話になるが、荻野側はそれを根拠にする。荻野朝忠は軍事行動の中で中心的な担い手になっていきます。山名氏がもう一度復活してきます。直義方の勢力として行動をする。荻野氏は足利氏側の勢力として山名氏を退治をする。朝忠の行動が非常におもしろく、自分だけでは不利だと思ったので足利尊氏の側近である高師直の息子（高師詮）を片田舎にいたのを取り立てて大将にし、負けてくるとご自害するよう師詮を切腹させる。自身はあっさりと逃げてしまう。この後「宮田」がでてきますが、多紀郡から氷上郡あたりに逃げたら荻野氏に絶対に負けないという自信があったのだろうと思います。そこに籠っていれば大丈夫だと、負けそうになるとそこに逃げて、また復活してくるといった状況が分かります。



荻野氏が書いたものが亀岡にある遠山（中津川）

という武士で、戦争で頑張ったら何をするかというと私は何月何日にどこで戦争やって敵の首をとりました等を書いていきます。軍事指揮官の荻野氏がサインをしたものが軍忠状になります。軍忠状をみるとどこで戦いがあったことが分かる。この際に荻野氏がサインをしているので荻野氏が軍事指揮官のトップであることが分かる。



同じく平尾家文書は宝塚市に残されているものですが、荻野氏のものであるサインが残されている。荻野氏は氷上を中心とした地域に強固な地盤を持っている。軍事力として非常に期待をされ、荻野氏自身は常に自分が拡大をする思考を持っているので戦乱の中では頼りになるが平時には荻野氏のような人がいると困る。京都側の勢力からすると問題にする。船井郡でも片山氏について荻野尾張守が執行しているのでしっかりとした権力をもっている存在。篠山の大沢荘については返せといった命令が１１回出たが、返さないので批判されている勢力である。

（２）その後の荻野氏

１３５４年は荻野朝忠の終見になります。単にわがままの人だったのかという話にもなりかねないが、荻野氏は独自の行動ができた謂れは「鹿王院文書」、京都の天龍寺の塔頭に鹿王院というのがあり、そこで明らかになっています。春屋妙葩（しゅんおくみょうは）というお坊さんが、京都の中でも非常に重要な役割を果たした人物の春屋妙葩が荻野朝忠の７回忌に法語を読んでいることがわかります。１３５８年に荻野朝忠は病に伏せっていたが天龍寺に寄進をしていることが分かります。臨終に際して「即心即仏」を１０余声を唱えて亡くなったことが記されている。京都側の勢力の対立ばかりを話してきたが、荻野氏というのは割と独自の幕府の命令を無視する形で活動していたのに生き残れていたのは、地域に大きな基盤をもち春屋妙葩などと幕府の勢力を介する事なく直接つながっていることなど強いコネクションを持っていた。朝忠の子供については尾張守某、左衛門尉某といった人物がいます。尾張守というのは朝忠自身は尾張守を名乗っていましたが、～守を名乗る一流と、左衛門尉を名乗る一流というのがいる。兄弟であるか一族であるのかは分かりませんが、この２系統の荻野氏がいたというのが分かる。

荻野氏の勢力は朝忠が亡くなったあともそのまま維持をされていた。仁木が復活するが、仁木頼夏が幕府の政変に巻き込まれ失脚をします。その際に武士が土地を違乱するということがたびたび行われていた話であるが、本来であれば守護がすることになっていたがこの段階では仁木がいなく、新たな守護もいないとき軍事力として誰が期待されているかというと荻野、中沢である。左衛門尉が雀部荘についても期待されている人物。雀部荘については命令を強制するのは荻野氏ではあるが違反をしている側も荻野氏である。荻野三河入道は雀部荘を攻撃し、かなりひどく行い、４１名の「御方物」ちゃんと名前をもっている人が殺され、民衆も多く亡くなり、女性も２人犠牲になっている。かなり無茶な軍事行動をしていることが明らかである。

一方、丹波守護については仁木がいなくなったあと、山名氏が守護に復活をする。山名氏は直義方についたあと幕府に服属していなかったが、最終的に服属するかたちになり南北朝の内乱というのは終わっていく。この後に荻野出羽守忠光という人物が足利義詮の警護に動員をされています。この人物には夜久郷には横領しているのは荻野出羽入道という名前がでてきますが同じ人物であると思われる。彼も幕府に従う一方、あちらこちらで横領している問題になっていく存在である。～守という系統については、出羽守というのが忠光の忠は朝忠の忠を継承しているものため、この人物が朝忠の後継者であっただろうと思われる。山名時氏の配下の武将とな

るのが荻野源左衛門尉ということで左衛門という名前の人物がでてきます。彼らというのは～守を名乗る人と、～左衛門を名乗る人の２系統の人が荻野氏の中に存続していることがわかります。彼は山名氏の元で軍事行動に参加しますが、山名氏と従属関係にはない山名氏が没落をするとあっさりと降伏をする。荻野氏というのはずっと強い勢力を持ち続けたことが分かる。丹波守護というのは１３９１年に細川氏が丹波守護になります。細川氏というのは丹波、他の国でもそうであるが自分の国の支配を守護から委ねられると自分の家臣たちを使います。現地にいる細川氏と無関係の勢力についてはまったく相手にしない。その結果、室町時代になると荻野氏の名前が非常に見えにくくなる。当時の幕府のトップの足利義詮の警護に動員されている荻野出羽守が、直接つながっている軍事力を奉公衆といいます。警護に動員されているのは荻野氏が一番たくさんでてきますがこの人たちのほとんどが、このあと奉公衆になっていきます。荻野氏は奉公衆として存在をしていたことは明確である。室町幕府の奉公衆については書き連ねた記録が残されており、萩野さんという勢力がおり萩野という武士はちゃんとした武士がいなく、荻野氏の間違いであると思われる。細川氏が室町幕府の体制のもとで、１３９１年以降に守護となる。１３９１年に丹波守護が細川氏になり、綾部にある安国寺文書に荻野出羽入道という名前がでてくるが勝手に土地を盗っているのは駄目だということで排除される。細川氏の支配からすると荻野という人は邪魔な扱いとされる。一方で結果、１５世紀を通じて荻野氏の名前がほぼ分からない事になり、歴史というのは史料が残っていないと議論ができない。京都側の史料はたくさん残り、京都の勢力からすると何かあれば土地を盗るような武士というのは非常に嫌われる人たちであるとその結果、名前もほとんど見えなくなってしまい、いなかった形になってしまう。細川氏の勢力はこの方法で入ってくる。室町時代に丹波守護は細川となっているので、このことで丹波は細川氏の管轄であったように表面上は見えます。現実は、兵庫と京都で別れるかは微妙であるが細川氏の勢力というのは強く及んでいたのが円の部分の地域のみである。

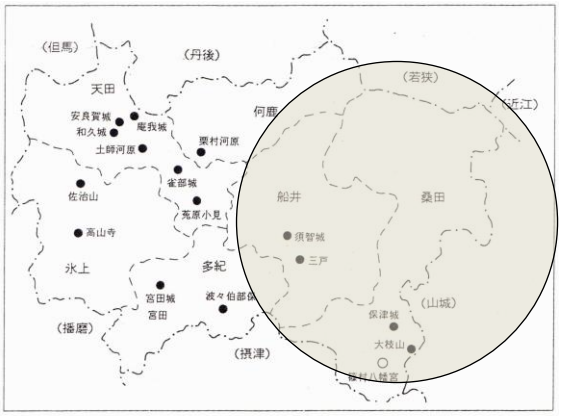


図 2　丹波合戦地等推定位置図

氷上、多紀の部分については細川氏の勢力というのは、特に氷上郡地域では史料的に京都の勢力の荘園自体がなくなってしまうという事もあり見えにくくなる。なぜかというとおそらく現地の武将が強かった。その代表が荻野氏であり、彼ら室町時代でも独自の勢力を維持していた。細川氏とは別に将軍と直接つながっていた奉公衆という立場にあり、細川氏がいなくてもやっていける勢力になっていた。荻野氏は史料上からいうと室町時代の応仁の乱以降１５世紀の後半以降になって荻野氏が登場する。

最後にもう一度まとめ

荻野氏について朝忠を中心に話をしましたが、現地（氷上郡）の勢力というのは非常に強い基盤というのと、京都との独自のパイプをもっている存在である。誰かにずっと付き合っていかないといけない訳ではないので自分の利害と合わなければ、離脱する。たびたび繰り返す。非常に自律的な力を持った勢力である。彼らがまた名前がでてくるのは、現地の秩序が緩んでからという事になる。ここから本格的な戦国にむかっていく。

～　資料　～

講座丹波学戦国の世と丹波Ⅱ第１回

南北朝内乱期の丹波ー荻野氏を中心にー　　大村拓生

はじめに

本年度講座丹波学の主題：明智光秀の丹波攻略

→今回はその前史として、氷上郡を拠点に光秀と対峙した赤井直正台頭以前に、当該地域を拠点としていた荻野氏について、その動静がもっとも顕著に見える南北朝期の荻野朝忠を中心に紹介

一、鎌倉期の荻野氏

１．荻野氏の丹波定着

荻野氏の出自：高望王ー平良兼ー（略）ー梶原景時ー景高ー荻野五郎景俊ー

（細見末雄『丹波史を探る』pp17 紹介、氷上町成松蔵「荻野氏系図」）

高望王ー平良茂ー（略）ー梶原景時ー景高ー荻野二郎景貞ー（『尊卑分脈』）

1200 鎌倉幕府によって誅伐された梶原景高の子孫が、梶原姓を憚って相模国荻野郷（厚木市）を名乗り→ 1221 承久の乱（後鳥羽上皇＝京方が北条義時追討をはかり大敗）後に丹波国葛野荘（氷上町西部）地頭職（**荻野五郎入道**）を獲得し西遷

六波羅両使としての荻野氏：鎌倉後期になると京都の荘園領主が自力で現地を支配することが困難に→公家政権の長「治天の君」を通じて六波羅探題に強制執行を依頼→丹波守護は六波羅探題のため六波羅奉行人・有力御家人が派遣

1305 多紀郡主殿保地頭の年貢抑留～中沢三郎左衛門尉・**沙弥忍性**

1312 仁和寺領弥勒寺別院抑留～飯尾但馬房善覚・三宮孫四郎国明・**荻野四郎入道忍性**

1317 松尾社領天田郡雀部荘乱入～伊山平九郎・**荻野弥三郎入道**

1325 松尾社領雀部荘～足立彦五郎・**荻野総三郎入道**（「所労」と称するも再任）

＊官職名を名乗らず在京人中沢などよりは格下も、実力が期待された存在、

２．鎌倉幕府の倒壊と荻野朝忠の登場

内乱の始まり：1318 後醍醐天皇即位～大覚寺統傍流の中継ぎの天皇→ 1332 現状の枠組み打破のための挙兵に失敗して隠岐へ流罪も畿内周辺は内乱状況に突入＝荘園領主相互の対立、荘園制支配再興を目的として利益を得られない両使執行に対する有力御家人の不満、新興領主層（荘園領主は「悪党」と呼称）の成長

後醍醐皇子の護良親王のもと河内国楠木正成・播磨国赤松円心などを鎮圧できず

荻野朝忠の登場：1333 赤松円心らの京都攻めに、隠岐を脱出した後醍醐が派遣した千種忠顕を大将とする軍勢に丹波国住人**荻野彦六朝忠**・足立三郎が加わるも、敗退して氷上郡高山寺城に籠城（『太平記』巻 8）

＊鎌倉期には荻野氏内でも傍流だった？朝忠がいち早く幕府を見限り

鎌倉から援軍を率いて上洛した足利高氏が情勢を見て、丹波国篠村八幡宮（亀岡市）で六波羅探題攻撃を表明→久下時重・長沢（中沢）・志宇知（須知）・山内・葦田らが参集→高山寺城の足立・**荻野**・本庄らは「**今更人ノ下風ニ立ツベキニ非ズ**」として別行動（『太平記』巻 9）→六波羅陥落を契機に各地の北条氏拠点が攻撃＝幕府滅亡

二、南北朝内乱の開始と荻野朝忠

1．足利尊氏の挙兵

建武新政の破綻：1333 帰京した後醍醐による「公家一統」＝鎌倉後期の地方分権・無責任体制を裏返した中央集権的独裁政治～諸勢力の支持を得られず混乱、武士の位置づけも不明確→ 1335 北条氏残党の蜂起によって鎌倉を追われた弟直義の救援に向かった足利尊氏が政権から離反し独自の武家編成、丹波でも久下時重・波々伯部次郎左衛門尉・中沢三郎入道が足利方で蜂起（『太平記』巻 14）

1336/2 尊氏が京都に攻め上るも破れて九州に逃亡→足利一門の仁木頼章を大将として久下・長沢（中沢）・**荻野**・波々伯部が高山寺城へ籠城（『太平記』巻 16）

＊ 2/3 仁木頼章が「和智片山人々」に井原岩屋（山南町）に集結を命令

4/14 夜久野合戦を皮切りに但馬・丹波で断続的に局所戦

南北朝内乱：5/25 湊川合戦～尊氏が新田義貞を破り楠木正成敗死→ 11 比叡山に逃れていた後醍醐から尊氏が擁立した光明天皇に神器引き渡し→「建武式目」で幕府再興を宣言→ 12 後醍醐が京都出奔、丹波でも新田一門の江田行義のもと足立・本庄などが活動

2．荻野朝忠の行動と寺社本所領

丹波の情勢：1337/5/26 栗村河原合戦（綾部市）→ 6/8 足利直義が近江蒲生氏を「但馬・丹波凶徒討伐」のため動員→ 7/28 土師（はぜ）河原合戦（福知山市）→ 8 後醍醐方が波々伯部（ほほかべ）保（篠山市）を拠点に高山寺城攻撃も久下氏に敗れ、曽地（篠山市）で処刑→ 9/27・10/9・11・17 和久城攻防戦（福知山市）→ 1339/6 和久城・雀部城の南朝方没落

荻野氏の寺社本所領押領：1336/9 尊氏から春日部荘地頭職（春日町）を拝領した赤松貞範の代官派遣を**荻野一族**が妨害→ 1337/10 和久城攻防戦での久下重基の軍功を**荻野彦六郎**が確認→ 1341/12 守護代**荻野彦六**の被官が丹波国一宮の出雲社（亀岡市）で濫妨狼藉→ 1343/4 幕府が武家被官の押領地を本所へ返付することを命令→**荻野源太左衛門**が押領を続けていた祇園社領波々伯部保についても在京武士山口の介入で返付承認

朝忠の離反：1343/11/24 **荻野源太**が**「御敵」**になり**「当国動乱」**のため波々伯部保に使者（「祇園執行日記」）→ 12/2 **荻野彦六**が**「隠謀」**を企てたため丹波守護仁木頼章が辞し、山　名時氏が任命（「同」）→**荻野彦六朝忠**が**「将軍ヲ恨ミ奉ル事有」**との情報を得た児島高　徳が蜂起を持ちかけ（『太平記』巻 24）→時氏が高山寺城を包囲して**「食攻」**し朝忠は**「降　人」**に（同）→片山親宗は**「高山寺西尾大日野」**に陣（『和知町誌』）→実際は 1334/3/27 までには決着

1344/8/6 **荻野尾張権守**に葛野荘（氷上町）領家職・沙汰人跡を与えた南朝文書（『氷上郡誌』）の一方で、1349/1/5 四條畷合戦では足利方武将の一人として**荻野尾張守朝忠**がみえる（『太平記』巻 26）

三、観応の擾乱後の荻野氏

1．荻野朝忠の守護職権行使

観応の擾乱：初期幕府による二頭政治～足利尊氏が武士統制、弟直義が公家・寺社と調整→荻野朝忠のみならず、戦争遂行のために荘園押領を肯定する尊氏執事の高師直などの志向と衝突→ 1350/10 直義が高師直・師泰兄弟排除を求めて挙兵→ 1351/1 直義方により尊氏・義詮父子が京都を逐われる→義詮が丹波石龕寺（山南町）に逃れ**荻野**・波々伯部

・久下・長沢（中沢）が結集→7一旦和睦した尊氏・直義兄弟が再び決裂して直義が北陸に没落→丹波守護の山名時氏も直義と行動を共にし、仁木頼章が守護に復帰→ 10 尊氏が南朝に降伏＝潜伏していた南朝勢力が各地で活動→ 11 尊氏が鎌倉の直義追討に向かい、仁木頼章がそれに同行

荻野朝忠の守護職権行使：1352/②/15「**丹波国守護荻野**」が追い落とされるとの情報（『園太暦』）→②/20 丹波から南朝方の千種顕経（忠顕の息）が京に侵攻し足利義詮が近江に逃亡→ 3/15 義詮が京都奪還→ 5/14 保津城攻め（亀岡市）・15 須知城攻め（京丹波町）・24 和久嶋・松崎合戦（福知山市）・6/6 庵我城合戦（福知山市）・6/20「**高山寺籠犬山**」合戦で敵を高山寺に追籠・7/14 八田（京丹波町）から保津城攻め・8/8 保津城を焼払いに中津河秀家が従軍し、朝忠が軍功確認（『亀岡市史』資料篇 1507）→ 7 篠村八幡宮領（亀岡市）返付を荻野三郎左衛門尉に命令（ただし同趣旨の文書がくり返し発給されており押領継続）→ 8/8 足利義詮が北野社領船井荘（南丹市）の荻野朝忠・一宮慈鏡の濫妨停止を命令→持明院家領大沢荘（篠山市）も朝忠が岩屋寺で義詮から「**掠賜**」、一度は仁木頼章により返付も再び押領、丹後でも荻野一族が義詮の「**奇破御下文**」を根拠に押領

山名時氏との攻防：1353/6/2 直義の養子足利直冬をかついで山陰を制圧した山名時氏が丹波進軍との情報が、「**荻野并武蔵将監等飛脚**」から到着（『園太暦』）＝武蔵将監は高師直の息師詮で、片田舎に「**隠レ居タ**」師詮を家臣の阿保忠実と朝忠が「**俄ニ取立テ大将ニナシ**」たもの（『太平記』巻 32）→ 6/12 西山善峰（京都市西京区）で山名勢に大敗し、師詮以下は切腹・「**荻野舎弟者討死、本人不見**」（『園太暦』）、師詮の切腹は荻野が「**今ハ叶ハヌ所ニテ候、御自害候へ**」と勧め朝忠は落ち延び（『太平記』）→ 7/5 中津河秀家が警固していた雀部城から「**宮田御陣**」（篠山市）へ馳せ参じ朝忠が確認・六瀬頼遠（猪名川町を拠点）も参集→ 7/22 体勢を立て直した義詮が時氏を京から追い落とし→ 7/23 三戸山（京丹波町）・7/26 小見（福知山市）で朝忠が追撃戦を行い足立又五郎が没落

２．その後の荻野氏

朝忠の排除：1354/4 船井郡の片山虎松丸の相続について「**守護御たいくわんおきのおわりの守**」に訴えがあり、「**おわりのかみの使者**」が執行→ 1354/8/18 仁木頼章が荻野尾張守の大沢荘押領を停止する文書発給、その後も 11 度の命令発給も応ぜず＝同時代史料における朝忠の終見（仁木頼章の守護職権回復）

晩年の朝忠：1364/1/29 幕府中枢に保護された春屋妙葩が朝忠七周期の仏事で法語（『鹿王院文書の研究』）～ 1358 天龍寺焼失の再建に際して病に伏せっていた朝忠が荘園を寄進、臨終に際して「即心即仏」を 10 余声唱える、事業は子息の**尾張守某・左衛門尉某**が引き継いで成就＝守護を介さない京都とのパイプを晩年まで維持

朝忠の後継者たち：1360/7 仁木頼章の丹波守護を継承した猶子の仁木頼夏が失脚→ 12 土佐家領大芋社（篠山市）の久下帯刀丞・聖暁律師の違乱停止が**荻野六郎左衛門尉**・中沢掃部入道に命令→ 1361/6 松尾社領雀部荘（福知山市）の**荻野三河入道**の違乱停止を**荻野六郎左衛門尉**・足立九郎左衛門尉に命令、翌月に三河入道は雀部荘を攻撃し「御方物」41 名刹害・手負い多数のほか、下部・女性 2 人も犠牲に（松尾社内の対立もあり、単なる所領紛争以上に暴力的な事態に）

守護山名氏と荻野氏：1364/3 山名時氏が幕府に服属し丹波守護回復→ 1367/3 **荻野出羽守忠光**が足利義詮の警固に動員→ 1369/10 幕府が安国寺領（綾部市）の夜久郷今西村（福

知山市）の**荻野出羽入道**による押領停止を守護時氏に命令→ 1374 雀部荘（福知山市）の「天田河上下鵜飼」を庵我荘給主の**荻野源六・源八**が押領→ 1380 山名時氏の後継氏清配下の武将として**荻野源左衛門尉・荻野五郎**が活躍→ 1391 明徳の乱で山名氏清が敗死も**荻野美作守重定・弟四郎左衛門重国**は降伏→丹波守護は細川氏に→ 1401 幕府が夜久郷今西村の**荻野出羽入道**による押領排除を守護細川満元に命令（山名氏のもとでは実質的には容認）

むすびにかえて

荻野朝忠～現地（氷上郡）への強い基盤・京都との独自のパイプをもとに、容易に足利方に編成されず、自己の勢力拡大を追求

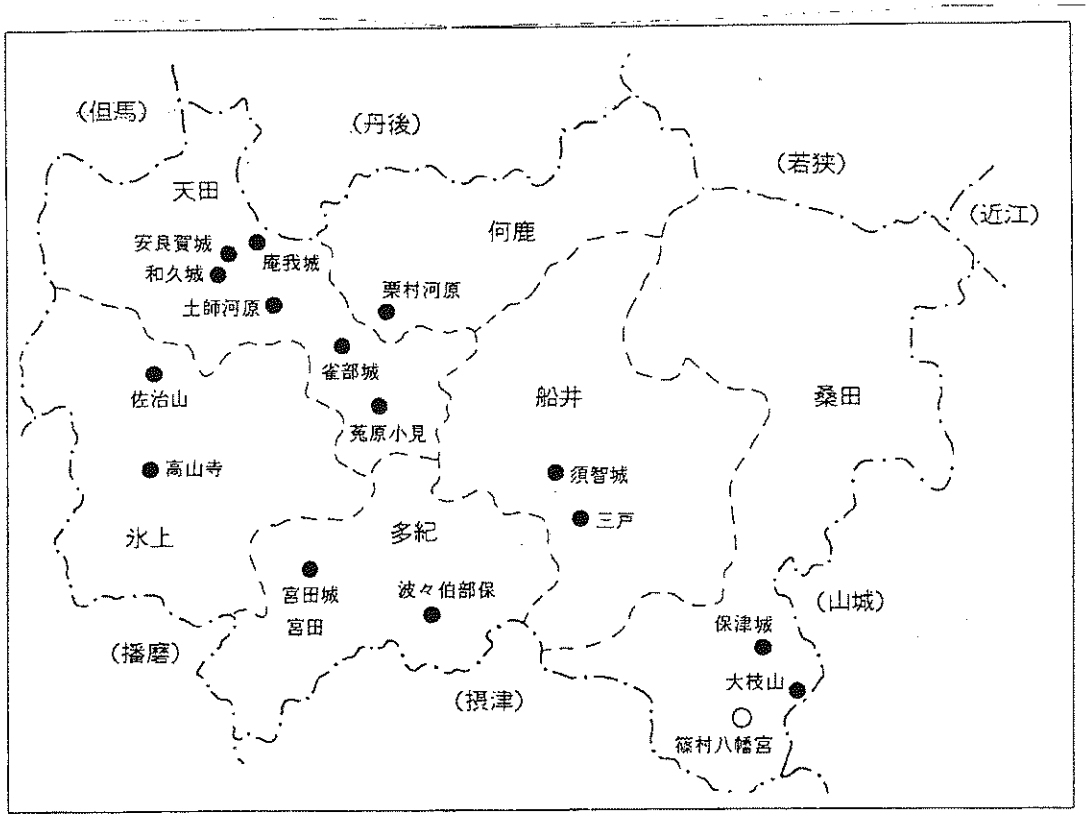
→後継者もその志向を継承するも、丹波守護細川氏は現地国人を登用せず

ただし室町幕府奉公衆（足利将軍と直接の主従関係を有する武士）として「萩野弾正左衛門」などが登場し、荻野氏のこと

1489 ～ 92 延徳の丹波国一揆の頭目として再び荻野氏が史料上に

関連論考：大村「南北朝内乱期の丹波荻野氏の動向」（『東アジアにおける戦争と絵画』甲南大学総合研究所叢書 110、2012 年 3 月）

大村「中世前期の夜久野」（『夜久野町史』第四巻通史編、2013 年 2 月）



丹波合戦地等推定位置図

第２回
国衆から見た明智光秀の丹波攻略

大山崎町歴史資料館館長　福島　克彦

はじめに

この丹波の森公苑の講座では、平成 24 年度(2012)に中世後期における丹波の国衆の興亡について報告させていただいた。さらに、平成 25 年度(2013)は内藤、波多野、荻野(赤井)氏を「丹波の三強」とまとめさせていただき、講演させていただいた。平成 26 年度(2014)の今回は、織田信長の時代、明智光秀が丹波を攻略した頃について紹介する。今回は、丹波の国衆側から、光秀の丹波攻略について見ていきたい。

1　明智光秀の丹波攻略

まず、戦国期の丹波についておさらいしておきたい。

室町時代の丹波国は、14 世紀末から基本的に細川京兆家が守護職を世襲していた。ただし、細川氏は他の畿内近国の守護と同じく任国に在国せず、在京して統治にあたっていた。次に丹波国守護代は、細川氏の内衆が担当していたが、このうち内藤氏が 15 世紀中葉から世襲化していく。内藤氏は有事の際、丹波国衆を編成していく役割を果たした。一時期、15 世紀後半に上原氏が守護代に就いたが、15 世紀末に再び内藤氏が返り咲き、16 世紀前半には船井郡の八木城(南丹市)を守護所とした。しかし、一六世紀に入ると、次第に多紀郡八上城(篠山市)を拠点とする波多野氏が勢力を伸ばし、内藤氏を圧倒して、これが事実上の守護代職を担うようになった。一方、内藤氏も松永久秀の弟長頼が宗勝と称して、家督を継承し、三好長慶の後援を得て、再び丹波を制圧した。しかし、永禄 8 年（1565）8 月に荻野直正が、宗勝を破り、次第に勢力を伸ばすようになる。当時、荻野氏は、赤井氏から猶子直正を迎え、荻野＝赤井氏の連携が成立し、氷上郡をまとめようとしていた。荻野氏は黒井城(丹波市)を軍事的拠点としていた。宗勝の戦死で、多紀郡の波多野氏も息を吹き返し、元秀、秀治が多紀郡から南桑田郡へと勢力を広げた。一方、宗勝の跡を継承した貞弘も南桑田郡の請負代官職などを担いながら、復活の機会を狙っていた。

永禄 11 年(1568)9 月、織田信長は、将軍足利義昭を奉じて、上洛を果たした。その際、前述した丹波の国衆も、その傘下に入った。赤井氏、波多野氏は信長と音信をかわし、内藤氏は織田権力の後援を得て、前述した請負代官職を確保していた。しかし、彼らは、あくまでも将軍義昭を中核とした体制に服したのであり、信長に心服していたわけではなかった。

そのため、天正元年(1573)に信長が義昭を追放すると、次第に信長と丹波国衆との対立が表面化し始める。まず、荻野直正は、信長と激しく抗争を続けた大坂本願寺と手を結んだ。さらに船井郡の内藤氏、桑田郡の宇津氏が、次第に信長と対立するようになった。このため、信長は天正 3 年（1375）重臣明智光秀を丹波攻めに向かわせることになった。以下は丹波攻略の年表である。

天正 3 年(1375)6 月、織田信長が丹波攻略を進める。
明智光秀を遣わすことを丹波国衆に伝える。
内藤氏と桑田郡宇津城の宇津氏が攻撃対象
天正 3 年 12 月、明智光秀が黒井城の荻野直正を攻囲する。丹波の国衆の大半が光秀に味方する。
天正 4 年 1 月、波多野秀治が裏切り、光秀敗走。その後、荻野直正を赦免する。
天正 6 年 9 月、光秀、八上城の攻撃を始める。
天正 6 年 10～11 月、伊丹城(有岡城)の荒木村重が信長に反旗を翻す。
天正 6 年 12 月、光秀、八上城の攻囲を厳重化する。
天正 7 年 1 月、波多野秀治の反撃。
天正 7 年 6 月、八上城陥落。
天正 7 年 8 月、黒井城陥落。
天正 10 年 6 月、本能寺の変(信長自害)、山崎合戦(光秀討死)。

あらかじめ、光秀による丹波攻略の概略を説明すると、第一次の天正 3～4 年と、第二次の天正 6～7 年の二時期に分かれる。第一次丹波攻略では、内藤、宇津氏がまず攻撃対象となり、さらに荻野氏の黒井城攻めとつ

ながった。ところが明智方として従軍していた波多野秀治が突然裏切ったため、第一次は失敗に終わる。この以後は、信長は荻野直正の詫言をいったん受け入れ、これと和睦した。その代わり、裏切った波多野秀治の制圧に主眼が置かれることになる。第二次の戦いでは、多紀郡の諸城を制圧した後、波多野氏傘下の荒木氏を落とし、八上城攻めに集中した。天正７年６月には八上城を、８ 月には再び信長と対立していた荻野氏の黒井城を、さらに宇津氏の宇津城を攻略した。以後、光秀は丹波国の統治が信長によって認められ、天正 10 年６月の本能寺の変と山崎合戦の敗北まで、それが続くことになる。

もっとも、光秀は丹波攻略に集中できていたわけではない。第一次は信長による越前一向一揆制圧に従軍し、第二次は大坂本願寺、さらには荒木村重の伊丹城攻めにも奔走していた。後述するように、光秀は、これらの反信長勢力が一斉に結びつくことを危惧していた。そのため、信長の指示を仰ぎつつ、他の織田方の部将たちと協力し、でき得る限り、個別的な切り崩しと互いの遮断を意識しつつ、軍事活動を進めていた。丹波攻略戦は、常に畿内近国の戦いに影響を受けつつ進められていたことを認識しておく必要がある。

2　小畠氏の存在

では、丹波攻略にあたった軍勢の構成は、具体的にどのような状況だったのだろうか。これも、また信長方に服属した丹波国衆であった。換言すれば、光秀の丹波攻略は、丹波国衆間の戦いでもあったわけである。

さて、光秀の丹波攻略で終始、これに服属し、前線で活躍したのが、船井郡宍人（南丹市）の小畠氏であった。その史料である『小畠文書』は、東京大学史料編纂所影写本が知られており、高柳光寿氏『明智光秀』、奥野高廣氏『贈訂織田信長文書の研究』でも引用されている。しかし、近年は京都大学総合博物館影写本、あるいは原本として大東急記念文庫、あるいは大阪青山歴史文学博物館などで確認できるようになった。

これらによると、小畠氏は、戦国期以降船井郡宍人に在住していた土豪であり、従来北野社船井荘（南丹市）の現地雑掌を担当していたことがわかる。また、細川氏被官も担っており、丹波における軍役にも参陣している。内藤宗勝戦死の直後は、波多野氏の傘下に入ったこともある。ちなみに宍人には、現在も小畠氏の山城、居館跡が明瞭に残っている。

このとき、光秀の傘下で活躍したのが、小畠永明なる人物である。最近の小畠氏系図の公開によって、彼が小畠左馬進、越前守と名乗る人物であることが確認された。すなわち史料上の「小畠左馬進」と「小畠越前守」が同一人物だったことが確認されたことで、光秀の丹波攻めを国衆の側から見通せるようになった。以下、検討してみたい。

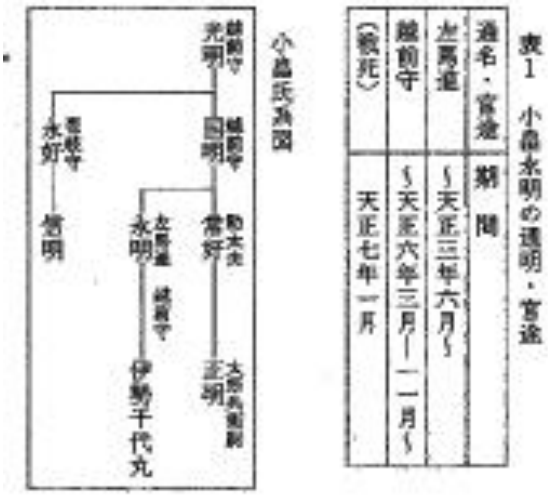


表1　小畠永明の通称・官途

通名・官途	期間
左馬進	～天正三年六月～
越前守	～天正六年三月～一一月～
（戦死）	天正七年一月

小畠氏系図

3 従軍する小畠永明とその負傷

光秀と永明が接触し始める天正３年頃から見ていきたい。

史料１ 明智光秀書状　『小畠文書』（大東急記念文庫）

明後日廿六、宇津表行に及ぶに付き、桐野河内へ至り着陣候、然らば各御心得ありとも、鋤、鍬、其外普請道具用意あり、彼表に至り着くあるべく候、人数之事、土民・侍男之類によらず、具を召されるべく候、杣在次第、まさかりを持ち、相連れらるべく候、若し雨降候らば、廿七日にたるべく候、少し降り候義は苦からざる候、聊油断あるべからず候、様体に於いては面をもって申し談ずべく候、恐々謹言

（天正３年）　　惟任日向守
七月廿四日　　光秀（花押）

小畠左馬進殿
御宿所

この史料は『新修亀岡市史』資料編２では、天正７年に年次比定されている。これは『信長公記』に同年「宇津構」陥落の記事があるためである。しかし、小畠永明は天正６年頃に通称左馬進から官途の越前守を名乗ること、また後述する史料２のように、天正３年にも宇津を攻めた記事があることから、むしろ筆者は天正３年と考えたい。天正３年６月、信長は光秀を丹波攻略に向かわせる際、丹波の国衆たちに内藤氏と宇津氏を攻撃対象にしたことを伝えており（『小畠文書』東大）、当初は、この両者の討伐を予定していた。実際、光秀は天正３年６月に丹波へ入国しており、京都龍安寺から出陣の祝儀を受けている（『大雲山誌稿』）。したがって史料１は丹波攻略のうちでも、もっとも古い段階の一つになりえる。次に内容についてみてみたい。

明後日の７月 25 日、光秀は宇津表の攻撃に際して、大堰川沿いの桐野河内（南丹市）に着陣する。その際、光秀は小畠左馬進に対して、①鋤、鍬、もっこ、其の外普請道具を持参する、②「人数」の土民・侍によらず、武器を携えて「人数」を率いること、③杣がいる場合は、鉞を持参して召し連れる、④雨天の際は 27 日でも可である、という内容が記されている。宇津（京都市右京区）は大堰川上流の山間部にあたり、軍道整備など、杣などの工作部隊の帯同が強く意識されていた。

当史料では、丹波攻略の軍役が、こうした国衆単位で徴集されていたことがわかる。軍勢の構成も「土民・侍男之類」によらず武具を携帯させる状況であり、「杣在次第」のように賦課人員も不明確である。ある意味付け焼刃で軍勢を召集させているような様相を呈している。当時織田権力では、明確な軍役の賦課基準がなかった。そのため、こうした軍役は恩賞をちらつかせる信長と、宛名となる小畠永明との個人的な契約関係によって維持されていた。光秀は、わずか一か月前に丹波攻略を担当することになり、何の法的根拠も拘束力もない状況で攻略が進められたことになる。

ところが、ちょうど天正３年 7～8 月の時期、信長の戦いの重点は越前の一向一揆鎮圧へと向かっていた。すると、光秀個人もこれの跡を追い、越前へ出陣することになる。次の史料２、史料３は、越前から、小畠左馬進永明への書状である。

史料 2 明智光秀書状　『小畠文書』（大阪青山歴史文学博物館所蔵）

（追伸）
尚以って、今度御出張、殊に御働之恩賞存寄ほとハ有間敷候へ共、なにとそ志を露べく候、馬路・余部在城之衆へ、其元油断なく馳走候へ之由申し送りたく候、只今は豊原ニ在城候、加州事も大略手間入間敷候、頓而隙を明け、是より直ニ丹波へ相働べく候、彼国より直ぐ宇津処へ押入べく候、上林衆より道よく候由申候、其分候哉、尚示合され承べく候、已上
（本文）
疵如何候哉、御心元なく候、其以後使者をもって成共申入べく処、遠路付無音、誠に本意を失い候、能々養性御油断あるべからず候、次此表之儀、府中に於いて各御粉骨之故、数多討捕、依之属一国平均候、明後日廿三、加州江相働候、是又彼国面々降参せしめ、迎のため罷出候条、即時平均をなすべく候、帰陣之刻、参駕を企て申出でべく候、恐々謹言

（天正３年）
八月廿一日　　光秀（花押）
小畠左馬進殿

「府中」（武生市）や「豊原在城」（豊原寺）、あるいは「加州」への軍事行動から、光秀が当時越前にいたことは確実である。その点から、天正３年の史料であることは確実である。

光秀は、冒頭から永明の疵について、強く心配し、その養生を気遣っている。そのうえで越前の経過を伝え、同国を「一国平均」を果たした上は、23 日から加賀へ進攻すると報じている。猶々書では、今回の永明らの「御出張」についてさほどの恩賞は望めないが、志を表わしてほしいと述べ、桑田郡の「馬路・余部在城之衆」に油断なく活動するよう伝えてほしいと述べている。馬路（亀岡市）は大堰川の左岸の比較的規模の大きい村落である。余部（亀岡市）は右岸の集落で、後の亀山城の前身になったところである。小畠氏に対し

て、南からの後援を強く意識している。さらに光秀は加賀から宇津へ押し入ると述べ、「上林衆」が「道よく」したことも記している。

ここで確認できることは、光秀が越前へ向かったことで、丹波攻略が中断したのではなく、そのまま軍事行動が進められていたことである。宇津氏との戦いが継続中で、結果として永明は傷を負い、恩賞も期待できない状況であった。そのことを勘案すれば、やはり局地戦では光秀方が劣勢であったものと思われる。ただし、何鹿郡の上林氏が「道よく」した記事、さらに桑田郡、何鹿郡の国衆を後援や通路の確保などに動員していた事実は、宇津攻めに際し、丹波の南北から後援できる体制は維持されていたことが理解できる。戦略的な視点に立てば、光秀方は優位を維持していた。なお、上林氏による「道よく」の記事は、前述した史料１の杣動員とも通じる点である。

史料 3 明智光秀書状　『小畠文書』（大阪青山歴史文学博物館所蔵）

（追伸）

尚以、今度越州へ出陣之処、懇志と云い、又手前御働と云い、得心之上、難尽心希候、廿一日ニ其国へ越候ハヽ、多少に寄らず志之通一所申付けるべく候、御懐中せはきニ付て可為心志計候、誠先年京都において相談せられる筋目深重に相通り候、返々疵養性之義専用に候、已上

（本文）

先日は陣中まて御音信懇切之至り候、仍って疵、御煩之由、上京辺より申し越し候、如何御心許なく候、時分之儀候条、油断なく御養生簡要候、今度丹羽出勢之義付、いろいろと気遣いなと候てハ、

養生之儀心元なく候、随分医師なとにも御逢候て、養よく候ハヽ、彼国在陣之内待申すべく候、来廿一日丹波出張候、わかき衆をハ御立てあるべく候、其方之事ハ縦能候共、寒天に向かい候間、先遠慮あるべく候、自然又彼国之様子より、機遣之事モ候ハヽ、案内申べく候、其時者乗物にても出陣あるべく候、其上彼表之様子、即時存分に任せるべく候、差儀もこれなく候処、煩能候共之なく候を、同道申候て、疵起候てハ、我々迷惑を恐れをなし候間、辺々出陣之儀は遠慮之覚悟あるべく候、恐々謹言

（天正３年）　　惟任日向守

九月十六日　　光秀（花押）

小畠左馬進殿

御宿所

この史料３からも、光秀が左馬進の疵と患いを強く気遣っており、養生を勧めた様子がうかがえる。そして９月 21 日から第一次丹波攻略を再開するが、若い衆をたて、永明本人は、たとえ体調が好転しても寒天に向かう時期なので遠慮を勧めている。文末でも戦場に同道し、疵の再発すれば「迷惑を恐れをなし」としている。猶々書でも、くどく養生を勧めている。服属した国衆に対して、きわめて強い気遣いが知られる。換言すれば、国衆に対する強い配慮が感じられる。これらは、史料２でも感じられる点である。よく言えば当時の光秀の気遣い、優しさが感じられるが、逆に言えば立場上の弱さも想像されよう。

さて、９月 21 日からの戦いがどのようものか、明確ではない。ただ 12 月には丹波西部の荻野直正が籠る氷上郡黒井城を攻撃するようになり、丹波攻略戦は一気に進展した。この時、丹波国衆の「過半」が光秀に味方していたという（「八木豊信書状」『吉川文書』）。ところが翌天正４年正月、丹波多紀郡の盟主で、八上城主の波多野秀治が突然裏切ったため、光秀による第一次丹波攻略は失敗した。光秀は命からがら京都へ逃げ戻っている。光秀にとって、味方も、敵も、裏切り者も、丹波国衆であったことになる。

4 第二丹波攻略と荒木村重の裏切り

天正４年２月、光秀は京都を出立し、早速丹波に入った。光秀は信長と協議し、敵対していた荻野直正とも一旦和睦し、攻撃対象を裏切った波多野秀治に移した。ただ、この当時光秀は体調を壊したらしく、しばらく養生を続けたようである。

この頃から、信長による畿内、近国の諸勢力の掃討戦の時期であり、大坂本願寺をはじめ、諸勢力との戦いが激しく続いた。その際、丹波国衆の一部も動員された。

さて、天正５年頃から、第二次丹波攻略が本格的に進められることになる。光秀は波多野氏の勢力範囲である多紀郡の 10 か所の城を落としたという（『三宅文書』）。天正６年９月には、明智光秀による八上城攻めが始まった。この時、光秀に敵対した荻野直正が病死しており、八上城攻めは容易と考えられてきた。

ところが、天正６年 10～11 月、伊丹城の荒木村重が大坂本願寺に通じ、信長を裏切る事態が起こった。そのため、織田方は大坂、伊丹、八上を一緒に敵対する状態となった。史料４は、その時の様子を示す、永明宛の明智光秀の書状である。

史料４ 明智光秀書状『小畠文書』（大東急記念文庫）

（追伸）昨日酉刻之御状、今朝辰刻京都ニ至而到来、被見候、飛脚油断なく、祝着ニ候

（本文）

一、摂州之儀、大略相破られるべく候、其意を得られ、其元普請以下油断有る間敷候

一、其元永々御在陣候之間、百人之兵糧を申し付け、和田次太夫を差し越し候

一、摂津守逆心ニ極候らわば、彼国ニ　上様御座所を拵候歟、御住国ニ相定まり候、然る時ハ以上之義、弥急速ニ相果たすべく候、

一、所々付城等、何茂堅固ニ覚悟あるべく候、荒平太類山越ニ自然来たる候へ共、指義之あるべからず候、何之取出成り共、若取詰候ハヽ、一騎きかせ候、先弥平次をハ亀山へ越候、我々も一両日中ニ越すべく候、

一、此折紙共、其方より御届あるべく候、孫十郎若年之義ニ候間、諸事御異見頼み入り候、信州へも此由申したく候、恐々謹言

（天正６年）　　惟日

十一月朔日　　光秀（花押）

越前守殿

御返報

本文は基本的に箇条書になっている。一条目で摂津国の敵城の大半が破却されたと報じ、小畠氏のいる丹波国の普請について油断のないように指示している。当時、八上城攻めが進んでいた時期であり、永明のような光秀に服属した丹波国衆は、多紀郡周辺に展開していた。二条目では在陣にあたっては百人分の兵粮を準備し、和田次大夫を向かわせている。さらに三条目では、緊迫している村重裏切りの様子を伝え、摂津守（荒木村重）の反逆が極まったならば、摂津国は信長の「御住国」に定まり、信長の御座所を築く必要がある、そのためにもこうした反逆行為を鎮圧しなければならないとする。所々の「付城」も堅固に構築するべきであるが、もし「荒平太」（荒木平太夫重堅　三田城主　村重の弟）が山を越えて押し寄せてきたならば、一騎をかけさせて、まず秀満を亀山へ向かわる、我々も一両日中に向かうとする。つまり、大坂、伊丹、三田、八上（篠山）と、現在の JR 福知山線沿いが一斉に反織田戦線を形成したことになった。光秀は、その連携を強く危惧していたに違いない。光秀は丹波国衆らとの迅速な連絡、通達を強く意識したようである。追伸の猶々書では前日の酉刻（18 時）に記された書状が、今朝辰刻（8 時）についたと、わざわざ記し、飛脚の状態の良さに満足している。

これらの内容から、光秀は丹波に滞在したのではなく、おそらく京都周辺にいたものと思われる。当時、荒木村重の反逆にあたり、摂津、丹波両方に目を配らなければならなかった様子がわかる。同時に、明智方の丹波国衆も、遠く光秀からの細かい指示を受けつつ、八上城攻めを続けていた。光秀も飛脚の様子に満足しつつも、常に後援に向かう姿勢を見せていた。

史料５ 明智光秀書状　『小畠文書』（大東急記念文庫）

（追伸）猶以って、其地へ越し候らわば、普請申し付けるべく候、其意を得られ、道具等御用意あるべく候、已上、御状之趣被閲、本望候

（本文）

一、錦山（金山）・国料（国領）、見廻りとして、相越され候処、何も堅固候由尤っとも候、誠に御精を入れられ候段、一入喜悦之至り候

一、此表之儀、とね山（刀禰山）普請一両日之内、首尾べく候、池田古城同前候、

一、高槻之義相済、去十六日、高山右近出頭候、然る間、昨日、此表に至り、　上様御馬を進められる

べく候処、茨木調略之子細候て、詰陣を仰せ相延し取りなされ候、茨木之儀者、大略相済べく候、さ候ハヽ有岡押詰かへり、鹿垣結廻されべく候由候、城中事之外多分之由候条、国中
平均仰付らるべく事、程あるべからず候、
一、爰元御普請已下隙明け候わば、先度より申すごとく候、其表へ越べく候、来廿四五日此置候共、
今月中たる由候、其意を得られ候、今少之間、弥御精を入れられるべく候、頼み入り候、恐々謹言

（天正６年）　　日向守
十一月十九日　　光秀（花押）
越前守殿
御返報

これは、永明が光秀に送った報告に対して、返信した内容である。永明は明智方の金山城、国領城を見回りに行き、それが堅固に築かれている様子を伝えたようである。これに光秀が喜んでいる様子がわかる。金山城（丹波市・篠山市）は、丹波多紀郡と氷上郡の境界にあたる山城で、現在も当時の石垣が残存している。立地からして、多紀郡の波多野氏と氷上郡の荻野氏の連携を遮断するために築かれたのであろう。国領（丹波市）は黒井城の東に位置する平城で、同城の荻野氏を監視するために補強されたものであろう。

当時、光秀は摂津国へ赴いており、刀禰山（豊中市）普請と池田古城（池田市）の改修も完成が間近であることを伝える。これは、史料４の段階よりも、村重との戦いが不可避な状態となり、伊丹城攻めの信長の御座所構築が決定的となったことを指す。刀禰山は西国街道に近い真宗寺内町であり、丘陵上にあった。池田古城は摂津国衆池田氏の拠点だった城で、天正３年時から「古城」となっていた。さらに高槻（高槻市）のことは解決したので、村重の与力だった高山右近が出頭したこと、さらに現在進行しつつある茨木城（茨木市）のことも解決したならば、伊丹（有岡）城を鹿垣でもって取り囲む予定である、と述べている。これは高槻城の右近が信長へ味方し、茨木城の中川清秀も信長方に服属するであろうという見通しを伝えている。このように光秀は、丹波で活躍する永明に対して、緊迫した摂津国の政治情勢を細かく伝え、事態の好転を強調していた。

追伸の猶々書では、摂津の情勢が一段落し、永明がいる丹波へ向かったならば普請を申し付ける予定であるので、普請道具を用意するように指示している。後述するように、同年翌月、波多野氏の八上城もまた、周囲に柵や堀が築かれて、兵粮攻めが強いられることになる。

この史料４、５でわかることは、光秀本人（あるいは重臣の秀満も）は、京都、あるいは摂津にいる状況で、丹波に在国していなかった点である。つまり、光秀のいない状況で、第二次丹波攻略戦が進行していた。永明は、しっかり八上城攻めの付城の管理をする一方、敵の行動を止めるため築かれた金山城、国領城の現場監督なども赴かせている。そして永明から逐一情報を得た光秀は、現場に対して指示を出している。丹波国衆からの情報は、すばやい対応が迫られたようで、飛脚の到着時刻も光秀の関心事項であった。

その一方で、荒木村重の裏切りなど、摂津国の状況も詳細に伝え、情報の共有化についても余念がない。村重の裏切り、高山右近の出頭、茨木の中川清秀の動向なども隠さず、現況を伝え、三田の荒木重堅の動向にも注意するよう命じている。言うまでもなく、第一次丹波攻略は味方だった波多野氏の裏切りで失敗した。第二次丹波攻略もまた、丹波国衆同士の戦いとなっている。改めて、国衆たちの裏切りを光秀は意識したであろう。ただ、文面を見る限り、光秀は永明を強く信頼していた様子がわかる。そして史料２、３と、その後の史料４、５を比較すると、気を遣いつつも、やや尊大な文面になりつつあることもうかがえる。そうした変化はどこにあったのだろうか。

5 八上城攻囲の厳重化と永明の戦死

天正６年 12 月に八上城攻囲を厳重化が進行した。有名な『信長公記』の記事を見てみたい。

史料６ 『信長公記』

波多野が館取り巻き、四方三里がまはりを、惟任、一

身の手勢を以て取り巻き、堀をほり、塀・柵、幾重も付けさせ、透間もなく、塀際に諸卒、町屋作りに小屋を懸けさせ、其の上、廻番を丈夫に
警固を申し付け、誠に獣の通ひもなく、在陣候なり。

光秀は丹波へ進み、いよいよ隙間なく八上城の周囲に堀、塀、柵で取り囲んだ。さらに廻番を丈夫にして、城内外の通行が一切できないよう、警固に力点を置いた。いよいよ八上城の本格的な兵粮攻めが始まったのである。

こうした光秀の徹底した城攻めを、八上城の波多野氏方も固唾を呑んで見守っていた違いない。しかし、彼らもまったく無抵抗であった訳ではなかった。敵の包囲網を打破するため、積極的に明智方の付城へ攻めかかった模様である。特に天正7年1月頃、波多野方の大きな反撃が展開された。

史料7 明智光秀書状『泉正寺文書』

(追伸)猶、荒藤(荒木藤内)の事、貴面を持って申すべき候、以上
(本文)籠山に至り、敵取り掛かり、合戦に及び候、明越討死仕り候儀、筆に成り難き者候、其れにつき、荒藤内鑓合わせ候段、珍しからず候といえども、近頃神妙、

(中略)
(天正七年)　　日向守
　正月廿六日　　光秀(花押)
(宛名欠)

史料7は宛名欠の光秀書状である。本文では、敵(波多野)方が「籠山」に取り掛かり合戦に及んだことが記されている。「籠山」とは現在八上城から篠山川を挟んだ北側にある段丘を指す。古くから明智方の陣城があったと伝えられてきた場所で、「勝山」という地名も残っている。残念ながら70年代のゴルフ場建設で遺構推定地の大半は破壊されている。

さて、狭められていく攻囲線に対して、波多野方が反撃に出たのであろう。その戦いは熾烈なものであったらしく、「明越」なる人物が討死にしたという。さらに明智方の荒木藤内は鑓を合わせ活躍したことが報じられている。多紀郡東部の荒木氏は、元来波多野氏の与力であり、当初光秀に対して抵抗していたが、途中で投降し、第二次攻略戦の軍勢に服していた。藤内もその一族であろう。

ところで討死した「明越」とは誰であろうか。これは「明智越前守」の略称である。この当時戦士した越前守・・・・実は、史料1～5で述べてきた小畠永明のことである。彼は天正6年頃から「明智」の名字を名乗っていたようである。光秀から名字を付与されていたのである。それを示すのが史料8の案文である。

史料8 明智光秀判物案『小畠文書』(東京大学史料編纂所影写本)

案文
越前討死、忠節比類なく候、然而、伊勢千代丸幼少之条、十三歳迄、森村左衛門尉名代申し付け、然るべき之由、各訴訟之旨に任せ、承諾せしめ畢んぬ、幼年に至っては、家督之事、相違なく伊勢千代丸進退たるべく候、後証として一族中をもって誓紙并森村誓紙、始末定め置き候、其意を得られ、相替らず馳走専用候、仍って件の如し

天正七年　　日向守
　二月六日　　光秀判
　　明智伊勢千代丸殿
　　小畠一族中

これは現在東京大学史料編纂所影写本のみでしか確認できない史料である。越前守永明が討死したため、子息の伊勢千代丸は幼少であるため、彼が13歳に成長するまで、近隣の土豪森村左衛門尉が名代として、これを支える、さらに光秀が伊勢千代丸の家督相続を保証し、小畠一族と森村の誓詞を交わすよう命じている。これは、討死にした国衆と家督相続に対して、上級権力がどのように対応したかを示す貴重な事例である。こうした保証によって、国衆たちは明智方のもとで軍役に参陣することができたことになる。もっとも、これは同時に家督相続に対する上級権力の介入でもあった。特に、本史料の宛名の一つが「明智伊勢千代丸殿」

となっている点である。明らかに明智名字を授けている様子が知れる。明智氏家中を服属した丹波国衆に広げていた様子がうかがえる。光秀は一族や近親者でなく、新規に服属した国衆らに自らの名字を授けていた。こうした明智名字の授与の事例は、他に近江堅田の猪飼氏、丹波船井郡の須智氏にも見られる。

天正３年の史料１～３では、光秀が永明に対してかなり気を遣っていた文面が特徴的であった。これに対して、史料４、５は、やや気心が知れ、光秀もかなり事務的な文面として記している。こうした、丹波国衆に対する距離感の変化は、明智名字の授与などによる明智家中の広がりがあったものと思われる。

図１　近畿周辺図

図２　丹波周辺図

おわりに

丹波攻略で、光秀は服属した丹波国衆たちをつなぎとめ、戦いを進めていた。攻略に際し、恩賞を提示する信長と国衆との個人的な信頼、契約によって成立していた。しかし、信長は軍役の賦課基準などを制定する姿勢を持っておらず、国衆たちを納得させる法的な根拠も見られなかった。その意味で、現場で国衆たちをつなぎとめる光秀の存在はきわめて大きかったものと思われる。彼が天正３年惟任姓を得て以降、名字明智を服属した有力国衆に授与していた事実は、明智家中を拡大していくことを意味する。苦しい戦局の中、国衆たちを統率する光秀らによって生み出されたものであろう。これらは、同じ信長の部将の羽柴秀吉が、投降した荒木重堅に木下名字を授与したこととも通じる。

もっとも、こうした家中への包摂という手法は、あくまでも明智方からの視点であり、どこまで国衆たちに納得されたかは、別問題である。前述した小畠氏は、天正10年６月の本能寺の変・山崎合戦の敗北後も存続した。早速明智名字を返上し、同年７月には羽柴秀吉に当知行目録を差し出して忠誠を誓っている。多くの丹波国衆たちは、さまざまな言い訳を考えて、明智滅亡後も生き残ったことを、私たちは改めて確認しておきたい。

第３回
明智系図の分析
日本歴史学会会員、土岐会会員　明智　憲三郎

日本史最大の謎「本能寺の変」は拙著『本能寺の変 431 年目の真実』（文芸社文庫、2013 年）で解明することができたと思っているのだが、その解明のために採用した手法が「歴史捜査」である。

この本能寺の変の謎について、これまでの多くの歴史研究には欠陥があると思っている。
その原因は江戸時代に書かれた軍記物から引用しているものがほとんどである。従って証拠が間違っているのではないか、という観点から研究を進めてきた。

ひとつ例を挙げると、この地元の八上城で明智光秀の母親が殺されたという説があるが、これも本能寺の変の 200 年以上あとの江戸時代後期に書かれた絵本太閤記という軍記物から引用しているわけである。江戸時代というのは木版印刷がビジネスとして大流行した時代で、明智軍記や絵本太閤記などの創作した物語が面白おかしく書かれている。

こうしたところから、私は現代の犯罪捜査の手法と同じく、最初から答えを決めずに、公家の書き物などから証拠を収集し、推理、捜査・解明し、構築し直す方法で研究してきた。

歴史は限られた時間だけで見るのではなく、連続して見なければならないと思っている。本能寺の変についても光秀と信長が関わった 14 年間だけで見るのではなく、本能寺の変の前と後ろに捜査範囲を広げて見る事が大事である。そうすると本能寺の変、千利休の切腹、あるいは関白秀次の切腹などという歴史の謎についても時の権力者である秀吉だけが情報操作ができ、それが事実となってさらに軍記物がおもしろい話を付け加えることにより定説ができあがってきたことがわかる。

しかし、先日の大河ドラマでも放送されたように千利休の切腹の原因は当時の唐入りへの諫言が原因ではないかという説を私は唱えていた。それが最近のマスコミも同じ説を取り始めるようになってきた。

今度は歴史を前に広げると信長と光秀は仲が悪かったと言われているが、実は信長と光秀の仲は親密であり信頼しあっていたということがわかっている。

では、なぜそこまで信頼し最後まで謀反を疑わなかったのか、ということについて一定の答えを出した。しかし、それでもまだ判然としない部分が残っている。そうしたことからよく解明されていない光秀の出自を追って前半生を探ることに努めてきた。

そこで、今日は明智系図の分析を中心に捜査収集した情報を皆さんに提供しながら、明智光秀の「前半生と出自」の謎を「歴史捜査」によって解明していくが、次のような内容で話を進めたい。

講座のアジェンダ

0　明智光秀の上洛直前からの経歴

1　現存する明智諸系図の分類
50 年ほど前に高柳光壽氏が「明智光秀」という研究者のバイブルともいえる本の中で「系図はどれも信用ならない」と言い、それ以後、歴史研究者が何も取り組まなくなってしまっている。はたしてそれで科学的といえるのか。そこで現存する明智系図をすべてリストアップして分類してみる。

2　明智諸系図の関係性分析
どの系図がどの系図を参照して作成されたのか関係性を分析する。
系図というのは作る必要性、動機があって作るものであり、自分を権威付けする必要があって作っているはずである。

3　蓋然性高い明智系図の復元
信憑性の高い二つの系図から蓋然性の高い明智系図を復元してみる。

4　明智光秀の出自・前半生の推理
復元された系図上で光秀がつながる二つの可能性を推理してみる。

明智光秀や本能寺の変を考える上で重要なのは、光秀が土岐氏であるということである。そして、それがどういう影響を与えるかということが重要なファクタ

一になる。

谷口研語先生の本の要約によると、土岐氏の発生は800 数十年前、源頼光の子孫の光衡が美濃の土岐川流域の土岐郡に土着して土岐を名乗ったところから始まる。その後、南北朝時代から歴代美濃守護を継承し、最盛期は美濃、尾張、伊勢の 3 カ国を治めるような大大名になる。そして、一族が濃尾平野一帯に広がって住み着き、明智に住み着いた土岐氏は明智、多治見なら多治見氏と名乗るようになるが、本姓は土岐である。その後、土岐は衰退して斉藤道三に追放されて滅びるが、それが本能寺の変の 30 年前の話である。従って土岐氏はまた、復活する可能性を残していると見られていたはずであり、本能寺の変直前に愛宕山で詠んだ有名な連歌の発句の「時は今、雨が下なる五月かな」のこの「時」というのは「土岐」を指している。土岐氏は百余家に分かれて、各地の地名を名乗っているが、家紋が「桔梗」であればそれは土岐氏の流れであると思って間違いない。そこで明智系図を調べるときには土岐系図も調査対象にしている。

0 明智光秀上洛直前からの経歴

次に明智光秀上洛直前からの経歴を見てみたい。そこではこれまでの軍記物の通説とは全く違う事実がある。

光秀は美濃の明智城にいて斉藤義龍から斉藤道三が攻められて滅ぶとともに道三側についていた光秀は諸国放浪の末、越前朝倉義景五百貫目で雇われたが、朝倉義景がものにならないと見限って信長に仕えた。これは明智軍記が作った作り話であるが、細川藤孝の正史に書かれているものを歴史学者が鵜呑みにしてしまっている。

また、歴史家によれば、将軍足利義昭上洛時に信長の間を取り持ったのが光秀であるといわれているが、先日、熊本のある家から出てきた書状によれば、「永禄 11 年の上洛の２年前に信長と義昭の間で上洛計画があった」という内容が書かれていた。すると上洛に際していまさら二人の間を取り持つ必要性はないはずである。

このように、上洛以前の資料はないが上洛以後は多くある。織田信長の存命中に書かれた朝倉始末記にも上洛以前には光秀は書かれていないが、信長の家臣として朝倉氏に攻め込んだことは後半に書かれている。

多聞院日記（奈良興福寺の僧侶の日記）、永禄六年諸役人附（幕府の役人の日記）、言継卿記（公家日記）、イエズス会日本年報、信長公記、ルイス・フロイス日本史などを総合的に判断すると、上洛直前には細川藤孝に仕えていて、幕府の足軽衆であり、上洛後、義昭から知行を貰うことにより幕府の直臣・奉公衆となった事がわかる。その後、比叡山焼き討ちの後、信長に仕えたということである。

残念ながらこれ以前の光秀の経歴・出自については不明である。明智軍記の作り話に縛られて研究の方向が違ってしまったことも影響しているのであろう。そこで、この講座では不明とされている光秀の上洛以前の経歴と出自を探るために、それぞれの系図を追いながら解明したい。

明智諸系図の分類表（明智がどこから起こったを示す系図）

世に出ている主な明智系図としては次のものがあげられる。

頼基・頼重系

A　尊卑分脈・土佐系図

公家洞院公定が編纂。死後、洞院家が編纂・改編・定政・追加。

第三者的な立場から書かれた公的な史料として信頼性が高い。

B　寛永諸家・土岐系図（寛永 18～20 年に幕府が編集）

明智一族の定政は家康に仕えて大名となり、家康から土岐姓を名乗ることを許された。従って明智一族は山崎の合戦で途絶えたと思われているが、実は今の東京・恵比寿に屋敷を構えて明治時代以降まで存続していた。その家系が幕府へ提出した系図なので信頼性が高い。

C　寛政重修諸家譜・土岐系図

D　系図纂要・土岐上野沼田系図

C・Dとも定政の子孫が追加しながら編纂したもの。

E　続群書類従・明智系図

寛永８年６月 13 日、光秀五十回忌に玄琳（妙心寺塔頭）より喜多村弥平衛へ贈すと書かれている。玄琳も弥平衛も光秀の子として書かれているが、光秀の弟に筒井順慶や三宅弥平次がいるのは怪しい。また、土岐氏の子孫なら先祖の源頼光にあやかって「頼」あるいは「光」の名がつくはずだが、信教とか康秀とあるのでこの玄琳という人物もあまり土岐氏に通じていないように思われ、信頼性低い。

F　続群書類従・土岐系図（1）

いろんな系図の寄せ集め。

頼清・頼兼系

G　続群書類従・土岐系図（3）

H　系図纂要・明智系図

J　熊本安国寺蔵・三宅系図

K　明智氏一族宮城家相伝

G～Kは明智軍記を参考に編纂されたものである。

参考１　明智軍記

参考２　土佐諸家系図

明智諸系図の関係分析図

頼基・頼重系統

推理１　Aは洞院公定が頼重までを書き、その後、一旦明智一族が美濃に引き上げたが、後に頼高以降、幕府役人として京都に住んだので、頼秀以降を書いた異本（前田本）が作られたとみられる。

推理２　Bは土岐家に伝わる土岐文書全文を記載した系図から簡略化して土岐家が作り、以降、C・Dと書き継いだ。

推理３　Eは土岐家に伝わる土岐家文書全文を記載した系図を妙心寺が入手し、玄琳がそれに光隆以降を追記し、自分と喜多村弥兵衛を光秀の子とした。（土岐家が妙心寺にこの系図の作成を依頼した可能性もある。）

推理４　Fは諸系図を寄せ集めて後世になってまとめた。光圀の根拠は不明。

頼清・頼兼系統

推理５　『明智軍記』は光秀の系図を作るにあたり、後醍醐天皇に加担して討たれて系統が途絶えた頼兼を祖とし祖父光継までを欠落させて当時の土岐家と繋がらないようにしたと思われる。

推理６　J・Kは自家が光秀の子孫であることを示す系図を作るため、『明智軍記』の系図の欠落部をEの系図で埋めた。

熊本安国寺蔵三宅系図　細川家伝来明智光秀公覚書　（J の系図）

この系図には多くの子どもがいるが正式記録には光秀の男児は２人であり、正室の子かもしれない。その他には側室の子や庶子もいるし、光秀の子と一緒に育てられた子どもも含まれているのかもしれない。

しかし、その中に出てくる冬廣は若狭の有名な刀鍛冶の子であり、また、某は大石内蔵助義雄の祖父、光保については服部平太夫（蓑笠之助　江戸時代の異色の代官）などさまざまな有名人を適当に当てはめたのではないか。そうしたいろんな名前を引っ張り出してきて繋げて作った系図ではないかと思わざるをえない。

ちなみに私の祖先はこの於鶴丸だが、京都の神社に匿われた。そして明智と名乗れないから明田と名乗っていたが、明治時代になって明智に戻して内務省に申請して認められた。戦前においては逆賊なので、祖父が系図を長持ちの中にしまっていて、ろくに見もしなかったらしいが、関東大震災で焼失し、側室の子らしいといった曖昧な記憶が残っている状態である。

確かに松寿丸についても「丹波船井郡塾居、子孫明田氏と号す」とある。また我が家に伝わっていたという光秀自筆の和歌には「山あいの霧はさながら海にして波かと聞けば松風の音」と詠まれていて、いかにも丹波の山間らしさが感じられる。正室は近江坂本にいたはずで、側室が丹波亀山城にいたのではないか。そうするとこの於鶴丸も丹波で生まれ育ったのかもしれない。

明智系図の復元版

寛永諸家系図伝土岐系図（今の土岐家に伝わっている系図）

【美濃在国系】

この系図によると、定政という人が 1550 年生まれで現在の土岐家の先祖であり、父の定明は斎藤道三との戦いで戦死している。この系図の中で光秀がどこに入るかという事である。ここでは頼典の子につないでいる。光秀は 1516 年生まれで本来なら 10 代目にあたるはずだが、先述の光秀の息子と称している玄琳は「父光秀は 55 歳で亡くなっている」と書いている。それが通説になっているが、そうなると間に一人はさまないといけない。

一方、幕府側の史料である当代記によると光秀 67 歳説が書かれているが、こちらなら９代目に頼典をはさんで光秀が 10 代目に入るのに不都合ないと考える。９代目にあたる頼典は 20 代で廃嫡になったため次男の頼明に家督を譲っているので光秀が 1502 年生まれでもおかしくはない。

尊卑分脈土岐系図

【幕府奉公衆系】

こちらの系図では光秀は寛永諸家系図伝土岐系図の中の５代目頼秀から繋がり、９代目光兼のあとの 10 代目に位置すると考えている。この系統の中には玄宣、政宣といった幕府の役人でありながら連歌の達人とよばれるような人たちもいるので幕府奉公衆系と名付けた。

そこで、光秀は美濃在国系なのか、京の幕府奉公衆系なのかということであるが、少なくとも美濃在国系の頼典か幕府奉公衆系の光兼には繋がっていると思われる。

光秀の出自・前半生の推理

明智光秀の出自と上洛前の前半生を推理するためには、A 幕府人脈の形成、B 軍事知識・能力の習得、C 連歌の習得をどこで行ったかが鍵となる。Aは「幕府奉公衆系」であれば容易である。Bはどちらでも戦国の動乱期に活動しているので容易であろう。Cは「幕府奉公衆」であれば容易である。

よって、「幕府奉公衆」の可能性が高いようにみえるが、光秀に関する史料は見つかっていない。別名を名乗っていた可能性を考慮して捜査を継続する必要がある。

「美濃在国系」はBのみを満たしているようにみえるが、史料としては光秀を見いだせるものが存在する。その信憑性はさらなる評価を要すが、一見して複数の史料の辻褄が合う。Aの裏付けを含めて捜査を継続する必要がある。

以下史料と解説を示す。

【『福井県史』所収　光秀書状】

「要　旨」

御書を謹んで拝見しました。誠にその後は日々取乱し言上できず、疎略しご迷惑をおかけしました。よって、次郎が越前に罷り越すことについて、朝倉殿より頂いた書状の通り仰せ下され畏れ入り存じます。元来こちらは事を構えない覚悟が本意ですので、今でもその思いです。しかるに、朝倉殿が同心してくださるとのことで満足しています。ついては、その書物をご披露のため写しを進上いたします。朝倉殿へ御取次の時には然るべきように御心得に成り仰せ下されば忝なく存じます。

「解　説」

次郎という名で越前に逃れたのは土岐頼武（頼芸の兄）とその子頼純である。頼武は永正 15 年（1518、光秀３歳）と天文４年（1535、光秀 20 歳）に越前に逃れ、朝倉軍の援助で美濃再入国した。

頼純は天文 12 年（1543、光秀 28 歳）７月以降、越前に亡命。翌年８月、朝倉・織田の支援で美濃再入国。９月に大敗して越前に引き上げ。天文 15 年９月和議がなり大桑城入城。翌年 11 月急死。道三による暗殺とみられている。享年 24 歳。

この書状が本物であれば年齢的に光秀は頼純に仕えていたことになる。頼芸・道三方ではなく。頼武・頼純方である。前野丹後守は他史料に見いだせない。

なお、光秀の享年を 55 歳とすると天文 12 年には 16 歳であり、年齢的にこの書状を書く立場にない。

山鹿素行「武家事紀」から

武家事紀は江戸時代後期に山鹿素行によって書かれた歴史書・武家故実書。全58巻。
素行が赤穂藩に配流中の延宝元年（1673）の序文がある。

この史料は軍記物ではなく、調査に基づいて書かれたものなので、記載されている内容はどこかから入手した情報である。光秀謀反の動機については「甫庵信長記」から取っており出鱈目である。

光秀の経歴については、元濃州明智の人で朝倉義景家臣黒坂備中守に仕え、後に細川藤孝に仕え、藤孝の所を出て、直ぐに足利義昭の奉公衆に列したと書かれている。「細川藤孝に仕え、その後足利義昭の奉公衆になった」という記述は拙著「本能寺の変　431 年目の真実」に記した史実と合致していて正しいので、その記述も正しい可能性がある。素行が何から情報を得たのか辿れば信憑性を確認することができる。黒坂備中守は実在の人物である。

文明13年（1481）頃、朝倉氏が築いた船寄の城の城主は朝倉氏家臣の黒坂備中守景久と伝えられている。天文21年（1552）一向一揆を攻撃するために朝倉宗滴を総大将として加賀に討ち入った時、堀江中務景忠麾下に黒坂解由左衛門尉景久の名が見え、その戦いぶりの詳述が文献に出ている。元亀元年（1570）越前に侵入してきた織田信長軍を迎え撃つために、黒坂景久は朝倉勢の一支隊として竹田風谷方面の警護に進発している。景久は翌２年７月の姉川の戦いで戦死し、３人の息子が後を継いだ。朝倉氏滅亡後信長に従ったが、天正２年（1574）越前の一向一揆に攻められ、三兄弟とも討死した。

光秀が直接朝倉義景に仕えたのではなく、黒坂備中守に仕えたのだとすると「朝倉始末記」に上洛前の光秀の名が出てこないことも納得がいく。

土岐頼純に仕えて越前に逃れ住んだことのある光秀が頼純の死後（頼純の追放後）知遇のある黒坂備中守に仕えた可能性が考えられる。

「遊行三十一祖京畿御修行記」から

時宗同念上人の天正六年から八年の状況を伝える。奥書に覚書に寛永七年（1630）書とある。朝倉義景を頼り、長崎称念寺門前に十年居住したと書かれている。「義景に仕えた」とは書かれていないので黒坂備中守に仕えたとする「武家事紀」の記述とも矛盾はしない。称念寺は黒坂備中守の船寄城下にある。

称念寺門前に住んでいたというのは「明智軍記」にも書かれている話であるが、この史料の方が成立が早い。信憑性が確認できれば有力な史料である。

信長や光秀など有名人との交流が要領よく書かれ過ぎている感もある。また、光秀のことを「日州」と書いているのが気になる。（惟任か向州が適切に思える）

なお、時宗は一遍を宗祖とし、下層の民衆、芸能者に浸透し、連歌師の中から時宗に帰依する者が多く出、「阿」号を称した。善阿、周阿などが有名で連歌師といえば時宗とまでいわれたとのこと。光秀の連歌の素養は時宗の寺に 10 年居たということであれば僧によって育まれた可能性が出てくる。幕府奉公衆には「阿」号を称する同朋衆の集団が存在していたことも関連あろうか。

「美濃明細記」について

伊東実臣作で元文３年（1738）成立と見られる。ただし、諸書を参照しているようで巻ごとあるいは記事ごとの信憑性評価が必要である。斎藤道三が義龍に討たれた戦いの記述の中に義龍軍の一員として明智十兵衛の名が書かれている。史料としての評価は低いが、何の飾り立てもなく光秀の名が書かれているところに検討の余地を感じる。道三に敵対する軍に加わっていることも前野丹後守宛書状に書かれている光秀の立場（反道三）と合致している。

したがって、光秀は美濃在国で頼武、頼純を支え、その後越前に移り 10 年住んだ後、義昭の家臣の細川に仕えたが、後に義昭の奉公衆へ出世したというストーリーが成り立つ。

しかし、今日の時点ではこれで間違いないというにはまだ研究の余地があり、これからも個々の史料の信憑性を確認するために捜査を続け、研究を深めていきたい。皆さんにとってもこれまでの通説と違った視点で見てみるきっかけになればと思う。

２０１４年１０月２５日
歴史工房　明智憲三郎

講座「丹波学」　戦国の世と丹波Ⅱ　～光秀と丹波～

第３回　明智系図の分析

明智憲三郎

【講座の狙い】

日本史最大の謎「本能寺の変　４３１年目の真実」（文芸社文庫、２０１３年）で解明することができました。解明のために採用した手法が「歴史捜査」です。本講座では明智光秀の「前半生と出自」の謎を「歴史捜査」によって解明してみたいと思います。

【講座のアジェンダ】

0. 明智光秀の上洛直前からの経歴
1. 現存する明智諸系図の分類

「系図はどれも信用ならない」（高柳光壽著『明智光秀』吉川弘文館、１９５９年）として何も研究しないのは科学的だろうか？　そこで現存する明智系図（土岐系図）を全てリストアップし（「明智系図の諸系図」）、分類してみましょう。（「明智諸系図の分類表」）

2. 明智諸系図の関係分析

どの系図がどの系図を参照して作成されたのか関係性を分析してみましょう。（「明智諸系図の関係分析図」）

3. 蓋然性の高い明智系図の復元

信憑性の高い二つの系図から蓋然性の高い明智系図を復元してみましょう。（「明智系図の復元版」）

4. 明智光秀の出自・前半生の推理

復元された系図上で光秀がつながる二つの可能性を推理してみましょう。（「光秀の出自・前半生の推理」、「戦国期幕府・美濃動乱の年表」）

【参考資料】

●文献

1. 『本能寺の変　４３１年目の真実』明智憲三郎著（文芸社文庫、２０１３年）
2. 『ここまでわかった！明智光秀の謎』歴史読本編集部編（新人物文庫、２０１４年）
　「子孫が語るその後の明智一族」明智憲三郎著
3. 『戦国時代論』勝俣鎮夫著（岩波書店、１９８３年）　（美濃動乱期に関して）
4. 『連歌辞典』廣木一人著（東京堂出版、２０１０年）

●史料

1. 『尊卑分脈』土岐明智系図
2. 『寛政重修諸家譜』土岐系図
3. 『系図纂要』土岐上野沼田系図、明智系図
4. 『続群書類従』巻百二十八　明智系図、土岐系図
5. 『熊本安国寺蔵　三宅系図』
6. 『明智氏一族宮城家相伝系図書』
7. 『明智軍記』
8. 『土佐諸家系図』東京大学史料編纂所データベース

２０１４年１０月２５日
歴史工房　明智憲三郎

0. 明智光秀の上洛直前からの経歴

（詳しい説明は『本能寺の変　４３１年目の真実』をご覧ください）

光秀が明智城落城時に脱出して越前に行き、朝倉義景に仕え、その後織田信長に仕えて上洛した話は軍記物の『明智軍記』の作り話であるが、熊本藩細川家が正史として作った『綿考輯録』が『明智軍記』を参考にして同様の話を書いたため、歴史学者も定説として扱ってしまっている（高柳光寿著『明智光秀』など）。

ところが、信憑性の高い史料への光秀の登場は永禄十一年（１５６８）の上洛以後である。朝倉義景の興亡を書いた『朝倉始末記』（天正五年頃、朝倉家家臣が書いたと見られている）にも上洛前には光秀の名前は出てこない。

『多聞院日記』、『永禄六年諸役人附』、『言継卿記』、『信長公記』、『イエズス会日本年報』、ルイス・フロイス『日本史』などの記事から総合的に判断できるのは、「上洛直前には細川藤孝に仕えており、足利義昭の足軽衆であった。その後、上洛し義昭から知行を貰い直臣の奉公衆となり、比叡山焼討の後に義昭から離れて信長に仕えた」ということである。

残念ながら、これ以前の光秀の経歴・出自については不明である。『明智軍記』の作り話に縛られて研究の方向が違ってしまったことも影響しているであろう。この講座では不明とされる光秀の上洛以前の経歴と出自を追ってみる。

【明智光秀の上洛直前からの経歴詳細】

永禄十年二月～永禄十一年五月
　これまでに細川藤孝に仕える『多聞院日記』『イエズス会日本年報』『日本史』
　この間に足利義昭の足軽衆となる『永禄六年諸役人附』
永禄十一年　九月　足利義昭・細川藤孝に供奉して上洛
　十一月　細川藤孝・連歌師紹巴らと親王の連歌会『連歌総目録』
永禄十二年　一月　本國寺で義昭を守り奮戦『信長公記』『言継卿記』
　義昭から知行（山城下久世荘）をもらい直臣の奉公衆となる
　四月　秀吉ら信長家臣と安堵状の連署発行を始める『織田信長文書の研究』
　六月　信長家臣・朝山日乗と対で朝廷と対応開始『言継卿記』
永禄十三年　一月　奉公衆として山科言継の正月挨拶を受ける『言継卿記』
（元亀元年）　信長、日乗・光秀宛に義昭を諫める五ヵ条の条書き発行
（永禄十二年？）四月　光秀の八幡宮領山城下久世荘押領を東寺が幕府に訴える
元亀二年　七月　信長、上野秀政と光秀に義昭への申し入れを依頼『蠹華院文書』
　九月　比叡山焼き討ちに参陣『信長公記』
　その後、信長から志賀郡を与えられて信長に仕える『信長公記』
　十二月　朝廷から信長に光秀押領の諸門跡領返還要求の綸旨発行

（注）永禄十一年＝１５６８年、元亀二年＝１５７１年、天正十年（本能寺の変）＝１５８２年

明智諸系図の分類表

2014年10月　歴史工房　明智憲三郎

系統		系図名	成立	記載の特徴	光秀の記載	母	生誕地	生誕年
頼基・頼重	A	尊卑分脈・土岐系図	1377～95年。公家洞院公定編纂、死後洞院家が編纂・改変・訂正・追加	説明文は幼名などわずかで情報量少ない。頼重で終わっている系図とその後に頼秀以降が書き込まれている異本（前田本など）が存在する。	記載なし			
	B	寛永諸家譜・土岐系図	1641～1643年。土岐沼田藩呈譜、幕府編纂。	関連する土岐文書（a頼重宛尊氏、b頼重宛義詮2通、c頼高宛義詮、d頼助宛義満、e頼篤宛義満、f頼秋宛義持、h頼弘宛義澄）の記載あり（一部は全文なし）。定政（藩祖）の説明文が多い。頼貞の子に頼清の記載なし	記載なし			
	C	寛政重修諸家譜・土岐系図	1789～1801年。土岐沼田藩呈譜、幕府編纂。	頼貞の子の頼基以下の記載。Bの定政の説明文を減じ、Bの後の系図を追記	記載なし			
	D	系図纂要・土岐上野沼田系図	1872年（明治6）土岐沼田藩が宮内省呈譜。	Bより説明文少なく、Cの後の系図を追記	記載なし			
	E	続群書類従・明智系図	1631年光秀の子と名乗る妙心寺僧玄琳が喜多村家へ贈呈。鈴木叢書十三所収明智系図と同じ	Bの説明文より多い。土岐文書（a、b、c、d、e、f、g頼秀宛勝元、h）の全文記載あり	頼典ー光隆ー光秀ー子 兵部少輔　明智十兵衛 従五位下　惟任日向守 彦太郎 明智玄蕃頭 彦太郎	武田義統妹	多羅城	享禄元年 1528
	F	続群書類従・土岐系図（1）	不詳	頼弘以下の異本としてA類似の記載あり。頼貞十男頼兼を頼清二男明智二郎と同一人として記す。その他の説明文は少ない。頼基・頼秀系、頼清・頼兼系の両方を参照した上で作成されたとみられる	頼典ー光國ー光秀 兵部少輔　監物助　明智日向守 （記載はこれのみ）	記載なし		

明智諸系図の分類表

2014年10月　歴史工房　明智憲三郎

頼清・頼兼	G	続群書類従・土岐系図（3）	不詳	説明少ない。代浅い。頼兼を頼清二男明智二郎とは別人として記載	記載なし			
	H	系図纂要・明智系図	不詳	土岐氏全般の系図。光継を頼兼七世として記載（光継の上は抜けている）。祖父・父・叔父・甥・子が書かれている。	光継ー光綱ー光秀ー子 明智十兵衛尉 明智安芸守 明智十兵衛・惟任日向守 （明智城脱出、朝倉仕官の説明短文あり）	記載なし		享年 五十五 の記載
	J	熊本安国寺蔵・三宅系図	熊本安国寺蔵。細川文書「明智光秀公家譜覚書」と同じ。1659年没の光貞、その子光宗の代まで記載あり	頼秀ー頼弘ー光継以下を記載。一人一人に説明文あり。光秀・晴光（玄琳）の説明文多い。山岸家との関連記載多い。光秀の三代後まで記載あり。光継と頼典を同一化。	光継ー光綱ー光秀ー子・孫 本名頼典　明智十兵衛 駿河守　玄蕃頭・千代寿丸 従五位下　熊千代また彦太郎 （明智城脱出の記載あり）	光綱妹 （実父：山岸信周）	可児郡 明智城	享禄元年 1528
	K	明智氏一族宮城家相伝	出口鉄三氏蔵（大正十二年謄写）	土岐文書（g、h）の記載あり。明智城落城の記載あり。光継ー光安ー光俊（三宅彌平治）の子を三宅家から宮城家へつないでいる。光継・光綱と頼典・光隆を同一化。	光継ー光綱ー光秀 本名頼典　本名光隆　明智十兵衛尉 兵庫頭　玄蕃頭　惟任日向守 民部少輔　十兵衛尉 駿河守・従五位下 千代寿丸　千代寿丸	光綱妹 （実父：山岸信周）	石津郡 多羅 或は 明智城	享禄元年 1528
	参考1	明智軍記	元禄六年（1693年）刊行版が現存。光秀の頼清頼兼系統系図の初出とみられる。	光継を頼兼七世として記載。祖父・父・叔父・甥・子、明智城落城、諸国放浪、朝倉仕官が書かれている。	光継ー光綱ー光秀ー子 明智十兵衛尉 早世 明智十兵衛	記載なし		享年 五十五 の記載
	参考2	土佐諸家系図	末文に「以上は明智軍記ニ見タリ」	光継を頼兼七世として記載。祖父・父・叔父・甥・子	光継ー光綱ー光秀ー子 明智十兵衛尉 明智十兵衛尉	記載なし		享年 五十五 の記載

応仁:1467　文明:1469　長享:1487　延徳:1489　明応:1492　文亀:1501　永正:1504　大永:1521　享禄:1528　天文:1532　弘治:1555　永禄:1558　元亀:1570　天正:1573
文禄:1592　慶長:1596　元和:1615　寛永:1624　正保:1644　慶安:1648　承応:1652　明暦:1655　万治:1658　寛文:1661　延宝:1673　天和:1681　貞享:1684　元禄:1688

明智諸系図の関係分析図

２０１４年１０月　歴史工房　明智憲三郎

推理１
Ａは洞院公定が頼重まで書き、その死後、頼秀以降を書いた異本（前田本）が作られた。頼高以降は幕府役人として京都に住んだとみられる。

頼基・頼重系統

１５０５以降　Ａ[redacted]

１５５１以降　[redacted]（定政まで記載、土岐文書全文記載）

１６４１～３　Ｂ[redacted]（定政以降を追記、土岐文書簡略化）

１７８９～１８０１　Ｃ[redacted]（定峯の後を追記）

１８７２（１８７３？）　Ｄ[redacted]（定富の後を追記）

推理２
Ｂは土岐家に伝わる土岐文書全文を記載した系図から簡略化して土岐家が作り、以降、Ｃ、Ｄと書き継いだ。

１６９３以降
Ｆ[redacted]
（頼秀系の異本としてＡの記述）
（頼典の次に光國ー光秀の追記）
（頼兼に「明智二郎・頼清二男」の追記）

１６３１
Ｅ[redacted]（土岐文書継承、頼典の次に光隆ー光秀ー子の追記、子に玄琳）

推理３
Ｅは土岐家に伝わる土岐文書全文を記載した系図（注）を妙心寺が入手し、玄琳がそれに光隆以降を追記し、自分と喜多村彌兵衛を光秀の子とした。

注：土岐家がこの系図の作成を妙心寺に依頼した可能性もある。

推理４
Ｆは諸系図を研究してまとめた。光國の根拠は不明。

頼清・頼兼系統

１６９３以前
[redacted]（頼兼七世光継ー光綱ー光秀ー子の追記、光安・光久系の追記、明智城落城説）

Ｇ[redacted]（頼兼を土岐十郎と明智二郎へ分離）

Ｈ[redacted]（頼清・頼兼の兄弟追記、頼兼の次に頼雄追記）

１６５９以降
Ｊ[redacted]（光継＝頼典の接続、頼定・頼尚の削除、光秀の子追加、子・玄琳継承、山岸家への接続）

Ｋ[redacted]（光継・光綱＝頼典・光隆の接続、頼定・頼尚の接続変更、玄琳削除、光俊から官城家への接続）

土佐諸家系図

推理５
『明智軍記』は光秀の系図を作るにあたり、討たれて系統が途絶えた頼兼を祖とし祖父光継までを欠落させて当時の土岐家とつながらないようにした。

推理６
Ｊ、Ｋは自家が光秀の子孫であることを示す系図を作るため、『明智軍記』の系図の欠落部をＥの系図で埋めた。

[テキストを入力]

明智系図の復元版

２０１４年１０月　歴史工房　明智憲三郎

●『連歌辞典』廣木一人（東京堂出版、２０１０年）より要約

【玄宣】げんせん
明智。頼連。細川政元家臣。文明十七年（１４８５）より「細川千句」に連衆。延徳元年（１４８９）、宗祇が連歌宗匠の後任に推薦するも辞退。

【政宣】まさのぶ
明智。玄宣の子。宗祇や父と多くの連歌会に出座。「細川千句」にも七度加わっている。その後、東国へ赴いた。

●『連歌総目録』『実隆公記』による玄宣・政宣の記録
１４６３年頼宣→１４８６年頼連→１４８９年～１４９８年玄宣（９５年兵庫頭）
１４８０～１５０８年政宣　（１４９０年中務少輔）

●『長享元年御番帳』１４８７年
四番衆　土岐明智兵庫助　同左馬助政宣

寛永諸家系図伝土岐系図

頼貞		
頼基		
頼重	1	美濃土岐明智に住し、明智と号す
頼篤	2	
國篤	3	
頼秋	4	
頼秀	5	１４４７大内義興奉書
頼弘	6	応仁・文明の間、美濃にとどまる
頼定	7	１４９５玄宣相論（知行地を折半）
頼尚	8	１５０２病あり、家督を頼明へ譲る
頼典	9	１５０２廃嫡
光秀	10	１５１６生誕

尊卑分脈土岐系図

頼高	6		
？＝ 光高	7	１４６３～１４９８連歌	玄宣
光重	8	１４８０～１５０５連歌	政宣
光兼	9	１４６９～１４８７生誕	
光秀	10		

【幕府奉公衆系】

頼明	１５０２家督
定明	１５５２討死
定政	１５５０生誕

【美濃在国系】

光秀の出自・前半生の推理

平成二十六年十月　明智憲三郎

明智光秀の出自と上洛前の前半生を推理するためには、A幕府人脈の形成、B軍事知識・能力の習得、C連歌の習得をどこで行ったかが鍵となる。Aは「幕府奉公衆系」であれば容易である、Bはどちらでも戦国の動乱期に活動しているので容易であろう、Cは「幕府奉公衆系」であれば容易である。

よって「幕府奉公衆系」の可能性を考慮して捜査を継続する必要がある。

別名を名乗っていた可能性を考慮して捜査を継続するようにみえるが、光秀に関する史料は見付かっていない。

「美濃在国系」はBのみを満たしているようにみえるが、史料としては光秀を見出せるものが存在する。その信憑性はさらなる評価を要するが、一見して複数の史料の辻褄が合う。Aの裏付けを含めて捜査を継続する必要がある。以下に史料と解説を示す。

【『福井県史』所収　光秀書状】

富山県

二　木倉豊信氏蒐集文書　東大史料編纂所影写本

一　明智光秀書状写

御書謹致拝見候、誠其以後者、依日々取乱候、不能言上候、相似疎略候哉、迷惑仕候、仍次郎越州へ罷越候ニ付て、朝倉殿より被進候御状之通被仰下候、令長存候、元来此方無事之覚悟本意之旨、今以其分候、然ニ越州御同心之筋目候之条、致測足候、就其書物写由為御披見進上仕候、朝倉殿へ御次之時者、可然様ニ被成御心得被仰越者可忝存候、宜預御披露候、恐惶謹言、

八月廿二日　光秀（花押影）

（前野丹後守殿）

要旨

御書を謹んで拝見しました。誠にその後は日々取乱し言上できず、疎略しご迷惑をおかけしました。よって、次郎が越前に罷り越すことについて、朝倉殿より頂いた書状の通り仰せ下され長れ入り存じます。元来こちらは事を構えない覚悟が本意ですので、今でもその思いです。しかるに、朝倉殿が同心してくださるとのことで満足しています。ついては、その書物をご披見のため写しを進上いたします。朝倉殿へ御取次の時には然るべきように御心得に成り仰せ下されば忝く存じます。

解説

次郎という名で越前へ逃れたのは土岐頼武（頼芸の兄）とその子頼純である。頼武は永正十五年（一五一八、光秀三歳）と天文四年（一五三五、光秀二十歳）に越前へ逃れ、朝倉軍の援助で美濃再入国した。

頼純は天文十二年（一五四三、光秀二十八歳）七月以降、越前亡命。翌年八月、朝倉・織田の支援で美濃再入国。九月に大敗して越前へ引き上げ。天文十五年九月和議がなり大桑城入城。翌年十一月急死。道三による暗殺とみられている。享年二十四歳。

この書状が本物であれば年齢的に光秀は頼純に仕えていたことになる。頼芸・道三方ではなく、頼武・頼純方である。前野丹後守は他史料に名が見いだせない。

なお、光秀の享年を五十五歳とすると天文十二年には十六歳であり、年齢的にこの書状を書く立場にはない。

【山鹿素行『武家事紀』抜粋】

明智日向守光秀、初名十兵衛尉、元濃州明智人也。朝倉義景家臣黒坂備中守所ニツカヘ、後細川藤孝ニ仕ル。藤孝カ歳ヲ出テ、高ニ群雄家義昭ニ奉公ノ列タリ、尤武勇ニ長ス、六條合戦ノ時、惣門ノ警固ハ、明智十兵衛タルヘシト、十七枚逸人札アリ、コレニ因テ光秀御所ヲ助タメテ三好ヲ防ク、而ノ信長越前朝倉退治ニ付、所ノ案内者ヲ求ム、義昭則光秀ヲ案内者タラシム、是ヨリ光秀信長ニツカヘ大ニ戦功ヲ顕ス、越前退治終テ、越前ノ守護職ハ、桂田藤摩守長綱コレデ承ル、信長ヨリ北庄ニ木下助左衛門・津田九郎二郎ニ光秀ヲサシツヘ、一國ノ政務ヲ司シム、而ノ忠賞・高島ヲ領シ、坂本城ヲ賜ハリ、信長ノ寵臣タリ、後丹波ヲ切取ニ可仕旨ヲ承リ、丹波ヘ出勢シ、波多野ヲヒキ付テ、安土ニヲイテ戦、害、横見但馬守ヲ枝、ツイニ丹波ヲ治ム、細川ハ元光秀カ主ナリトイヘトモ、家臣有吉ヲルノミ、越中守忠興ノ軍トス、由ニ此細川ト宗合テ、丹波ノ一色ヲ退治スルナリ、秀吉毛利家討譲ノ加勢大將トメ、中國ニ出勢ノ時、ツイニ信長ヲ弑ス、光秀謀叛カ家臣蒲生藤内藏助利三ヲ老臣トス、稲葉是ヲ信長ニ訴、信長此事ヲ光秀ニ告、光秀不肯ノ云ケルハ、先手ヲツトメ軍用ヲ勤スル者ハ、人ノカマイナル良臣ヲタクワヘスシテハ、大功立カタシト云、信長光秀ヲ近ク召ノ咎ヲ以テコレヲ托開セラル、群臣列参ノ時分ユヘ、光秀大ニ赤面ス、稲葉モコレニヨツテ憤ヲ押ユ、其後光秀、遠君安土ヘ水陸ノ馳走人トシテ経営美ヲ盡スノ處、俄ニ中國ノ加勢ヲ承、光秀ハ人数ヲ出シ、中國ニテ野死セラルヘキ沙汰ヲ聞テ、此憤ヲ金ケルト云傳、（『武家事紀』）

『武家事紀』は江戸時代前期に山鹿素行によって書かれた歴史書・武家故実書。全五十八巻。素行が赤穂藩に配流中の延宝元年（一六七三）の序文がある。

軍記物ではなく、調査に基づいて書かれたものなので、記載されている内容はどこかから入手した情報である。光秀謀反の動機については『甫庵信長記』から取っており出鱈目である。

光秀の経歴については、元濃州明智の人で朝倉義景家臣黒坂備中守に仕え、後細川藤孝に仕え、藤孝の所を出て、直に足利義昭の奉公衆に列したと書かれている。「細川藤孝に仕え、その後義昭の奉公衆になった」という記述は拙著『本能寺の変　431年目の真実』に記した史実と合致していて正しいので、その前の記述も正しい可能性がある。素行が何から情報を得たのか辿れれば信憑性を確認することができる。

黒坂備中守は実在の人物である。

文明十三年（一四八一）頃、朝倉氏が築いた舟寄の城の城主は朝倉氏家臣の黒坂備中守景久と伝えられている。天文二十一年（一五五二）一向一揆を攻撃するために朝倉宗滴を総大将として加賀に討ち入った時、堀江中務丞景忠麾下に黒坂解由左衛門尉景久の名が見え、その戦いぶりの詳述が文献に出ている。元亀元年（一五七〇）越前に侵入してきた織田信長軍を迎え撃つために、黒坂景久は朝倉勢の一支隊として竹田風谷方面の警護に進発している。景久は翌年二年七月の姉川の戦いで戦死し、三人の息子があとを継いだ。朝倉氏滅亡後信長に従ったが、天正二年（一五七四）越前の一向一揆に攻められ、三兄弟とも討死した。

光秀が直接朝倉義景に仕えたのではなく、黒坂備中守に仕えたのだとすると『朝倉始末記』に光秀の名が出てこないことも納得がいく。

土岐頼純に仕えて越前に逃れ住んだことのある光秀が頼純の死後（頼芸の追放後）、知遇のある黒坂備中守に仕えた可能性が考えられる。

【『遊行三十一 祖京畿御修行記』抜粋】

天正六年正月

正月廿三日御行事成就し七條へ御帰寺。同廿四日坂本惟任日向守へ六条被ゝ通。南都御修行有度之條御井原慶へ日向守一書可ゝ有之旨被ゝ申。越前倉義景被ゝ申。其時稱念寺門前に十ヶ年居住故念寺にて、六条書情甚に付て坂本暫留被ゝ申。惟任方もと明智十兵衛尉といひて、濃州土岐一家四人たりしか、越前朝倉義景被ゝ申。折節大和筒井方安土へ年始之出仕、則惟任取次なれゝ來儀幸、六条直行合遊行上人南都御修行日州助言故順慶無二別儀、御請被ゝ申ゝ。同晦日六條御影堂へ入御、日中行事以後種々取成被ゝ申上候ゝる。

『多聞院日記』の記事と整合している

頼芸追放から義昭越前入りまでの十年と整合

時宗同念上人の天正六年から八年の状況を伝える。奥書に寛永七年(1630年)書とある。

朝倉義景を頼り、長崎称念寺門前に十年居住したと書かれている。「義景に仕えた」とは書かれていないので黒坂備中守に仕えたとする『武家事紀』の記述とも矛盾はしない。称念寺は黒坂備中守の舟寄城下にある。

『明智軍記』に書かれている話であるが、この史料の方が成立が早い。信憑性が確認できれば有力な史料である。

信長や光秀など有名人との交流が要領よく書かれ過ぎている感もある。また、「日州」という語の使用が気にはなる。(惟任か向州が適切に思える)

なお、時宗は一遍を宗祖とし下層の民衆、芸能者に浸透し、連歌師の中から時宗に帰依する者が多く出、「阿」号を称した。善阿、周阿などが有名で連歌師といえば時宗とまでいわれたとのこと。光秀の連歌の素養は時宗の僧によって育まれた可能性が出てくる。幕府奉公衆には「阿」号を称する同朋衆の集団が存在していたことも関連があろうか。

【『美濃明細記』第七巻 抜粋】

伊東実臣作で元文三年(一七三八)成立と見られる。ただし、諸書を参照しているようで巻ごとあるいは記事ごとの信憑性評価が必要である。斎藤道三が義龍に討たれた戦いの記述の中に義龍軍の一員として明智十兵衛の名が書かれている。史料としての評価は低いが、何の飾り立てもなく光秀の名が書かれているところに検討の余地を感じる。道三に敵対する軍に加わっていることも前野丹後守宛書状に書かれている光秀の立場(反道三)と合致している。

第十三巻奥書には左記記述があり、元々は斎藤利良の書とあるが、第十三巻のみのものか全体のものか不明。

第十三巻(最終巻)奥書(略記)

此一冊持是院法印妙全(斉藤新四郎利良)之記也、今又土岐軍記及び斉藤記、更に浅岡氏之憶説ヲ輯録スル者也　斉藤一族　花村外記利房　永禄十二年九月十五日

右一冊持是院舊本外記所新増也　花村修理利昌　文禄三年二月二十一日

此本家伝之舊記也、今又慶長軍記及大田牛一日記、諸家舊記、古老傳説等校合・増補

(名の記載なし)元和三年仲春十三日(一六一七)

けり。則ち道三ご女子を断て、素服を改めて一色左京大夫義龍と稱す。道三大に怒り、弘治元年冨中の勢を催しけれ(ども、義龍の勢に加り鷲山へは十が一も参らざりけり。義龍の味方に加はる宗徒の輩には、情婆因幡(周防)守、原紀伊守、蜷木大事介、石谷近江守、明智十兵衛、加原式部、衣斐実三右(左)衛門、高山伊賀守、同右近、土岐右京、本庄民部少輔、遠山刑部、蜷巣六郎左衛門、食我猪内蔵助、池田又太郎、原藤右京、山縣三郎、峰脇兵庫頭、金山二郎左衛門、相原帯部介、

2014年10月　歴史工房　明智憲三郎

2014年10月25日
歴史工房　明智憲三郎

【土岐氏】谷口研語著『美濃・土岐一族』からの要約

土岐氏の発生は、八百数十年前、源共頼光の子孫光衡が美濃の土岐川流域の土岐郡に土着して土岐氏を名乗ったところから始まる。以後、美濃を基盤に発展し、南北朝動乱の初め四代頼貞が美濃守護となってからは歴代美濃守護を継承して戦国時代に至った。頼貞の孫で三代守護の頼康は尾張・伊勢の守護も兼ね、このとき土岐氏は最盛期を迎えた。頼康の守護在任は美濃四十六年間、尾張三十七年間、伊勢十六年間続いた。

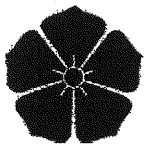
その間、土岐一族はそれぞれ拠った地名を名字に冠し、新しい家を興しながら濃尾平野一帯に分派し、分出した一族は百余家になる。分出した家は明智荘に拠った明智氏のように新しい名字を名乗りながらも「土岐明智」とも称し、土岐の名字を捨てなかった。土岐一族として共通の基盤を持っていたこと、それが社会的にも認知されていたことを示している。

一族の発展は強固な結束によるところが大きく、それが具体化されたものが「土岐桔梗一揆」である。一揆とは「揆を一にする」、つまり、一つの目的のために団結するという意味で、武士たちの一つの戦闘単位も一揆といい、『太平記』には頼康率いる軍勢を土岐桔梗一揆と呼んでいる。土岐氏の家紋を冠した戦闘集団、それが土岐桔梗一揆であった。

しかし頼康没後、土岐氏の勢力を恐れた三代将軍足利義満の画策によって一族の内紛が起き、室町幕府への反乱「土岐康行の乱」へと発展した。明徳元年（１３９０）に四代守護康行が幕府の追討を受けて没落する。これにより土岐一族の結束は崩壊し、一族の分裂や主家を捨てて幕府奉公衆となる有力庶家も多く、明智氏も幕府奉公衆となっている。土岐一族の池田氏が引き継ぐことによって唯一土岐氏が継承した美濃守護職も、その実権が斎藤氏に移った段階では、もはや一族としてのまとまりはなくなった。天文二十一年（１５５２）、土岐氏最後の守護頼芸が斎藤道三によって美濃を追われ、これにより頼貞以来二百年間継承されてきた美濃守護土岐家は没落した。

【土岐一族一覧】

饗庭　相原　浅野　蘆敷　麻生　荒川　石谷　西池田氏　一色氏　市原　乾　稲木　今峰　牛牧　井口
宇田　揖斐　梅戸　植村　宇都　大桑　衣斐　大島　江戸崎　大須　大竹　隠岐　大西　表佐　奥田
乙部　落合　下石　小里　笠毛　柿田　金山　金森　北方　萱津　郡家　木和田　久尻　久々利
神戸　気良　小柿　小宇津　小島　御器所　小弾正　西郷　佐良木　猿子　志多見　島田　志多見
陶器　芝居　須原　菅沼　瀬田　墨俣　曽代　曽我屋　仙石　高田　高松　高山　田中　多治見
田原　月海　土居　遠山　妻木　徳山　外山　長沢　長瀬　長森　長山　西脇　則松　萩原　羽崎
蜂屋　浜　原　肥田　東池田　深坂　肥田瀬　深沢　福光　藤田　舟木　穂保　堀内　本庄　槇野
丸茂　満喜　溝尾　三栗　三宅　武藤　村山　屋井　山尻　山本　吉田　世保　鷲巣　六ノ井　和田



【土岐桔梗紋】

明智氏の諸系図の抜粋

2014年10月　歴史工房　明智憲三郎

●A【尊卑分脈】　永和3年～応永2年（1377～1395）洞院公定が編纂、死後洞院家が編集・改変・訂正・追加

頼貞…頼直…高頼
道謙
頼衡
周崔
頼遠
頼仲
土岐九郎　彦九郎　彦六　明地美乃　美乃　明知美乃　明地十郎　文明時人
号明地　号明智　始頼人　彦一郎
属尊氏　属義詮
頼兼…明知中務少輔
頼明

注：「[illegible]」の記述あり
注：文明年間は1469～1487年

歴史工房　明智憲三郎　2014年6月

●B【寛永諸家譜（寛永諸家系図伝）　土岐系図】　寛永18～20年（1641～1643）に幕府編纂。定政の説明が多い。

頼貞…頼遠…周濟
[illegible]
九郎　彦九郎　氏王丸
早世　号明智　十郎
明智祖　注1
光賢　頼重子
十郎…不孝
彦九郎　彦九郎　注2
天文二十一年討死
⇒注：1552年
（以下略）

注1　頼重の説明文：彦九郎、住土岐明智、号明智、あけちひこ九郎・ときまご三郎宛尊氏判物、義詮下文。頼重の死後、弟頼高が一旦継承して頼重の子頼篤に継がせたとある。頼高への義満領地安堵状に明智荘の記載がない。

注2　定政の説明：菅沼藤蔵、父討死時二歳、三河に逃れる。永禄七年家康に仕え菅沼氏称す。文禄二年復姓。長文説明あり

●C【寛政重修諸家譜　土岐系図】　1789～1801編纂。Bの定政の説明を減らし定峯の後を追記

●D【系図纂要　土岐上野沼田系図】　Bより説明が少ない。寛政重修諸家譜のさらに後の追記あり。明治6年（1872）土岐沼田藩家が宮内省呈譜したもの

●E【続群書類従　巻百二十八　明智系図】　喜多村家明智系図、鈴木叢書十三所収明智系図と同一物。寛永八年（1631）6月13日光秀五十回忌に玄琳（妙心寺塔頭六十五歳）より喜多村彌平衛（内治麻呂）へ贈と記す。頼典・定明までの説明文はBより多い。（1623に家光が将軍。1634に春日局が妙心寺に麟祥院を開基。玄琳は妙心寺・瑞松院に住す。瑞松院の檀那は光秀の妻の実家・旗本妻木氏。玄琳の師は大心院主・三英瑞省で、細川ガラシャの夫・細川忠興が檀那。妙心寺には明智風呂があり、その鐘は春日局が寄贈）

頼定…[illegible]…光隆…光秀…（続く）
土岐九郎　注1　十郎　十郎
頼貞末子・早世
玄宣と相論
明応四年
廃嫡　注2
文亀二年
注3
彦九郎　彦九郎
（筒井順慶）
（三宅彌平次）

注1　頼重の説明文：彦九郎、号土岐明智、領土岐郡の内明智郷、あけちひこ九郎・ときまご三郎宛義詮判物、尊氏下文。（Bとは逆になっている）

注2　光隆の説明文：明智玄蕃頭、妻武田義統妹、幼名彦太郎、天文十一年から十四年に土岐一族敗北の際戦死（天文十一年1542年：土岐頼芸が道三に敗れて追放）

注3　光秀の説明文：彦太郎　享禄元年（1528）三月十日濃州多羅城誕生。母武田義統妹。

（光秀から続き）
女（菅沼新八郎定盈妻）
女（桜井監物家次妻）
女（織田信澄妻）
女（細川忠興妻）
女（筒井定次妻）
女（川勝丹羽守妻）
[illegible]
安古丸（山崎合戦討死）
僧不立（天龍寺塾居、音羽川辺横死）
女（井戸三十郎妻）
十内（筒井定次養子、後左馬助、坂本城自害）
[illegible]
内治麻呂（母喜多村保光女、天正十年元旦誕生）

●F【続群書類従　巻第百二十八・系図部廿三　土岐系図（1）】

頼貞…頼直…高頼
土岐小太郎
土岐二郎
道謙
土岐四郎
頼衡
墨俣八郎
周崔
[illegible]
頼遠
土岐七郎
頼仲
土岐八郎
頼里
頼明
土岐弥十郎
[illegible]
土岐九郎　注2　十郎　十郎　六郎　七郎　注3
明智二郎・注1
光國…光秀
監物助　明智日向守
[illegible]
天文二十一　討死　菅沼藤三・

注1　頼兼の説明：太平記作頼貞。元弘年中に後醍醐天皇の陰謀に加担し討たれる。下野守。号下野入道。頼清二男。

注2　頼重の説明：号明智彦九郎

注3　頼弘の説明：異本作頼高。而其子光高。光高子十郎光重。弟政宣。光重子光兼者三代系譜。光重者文明時人。

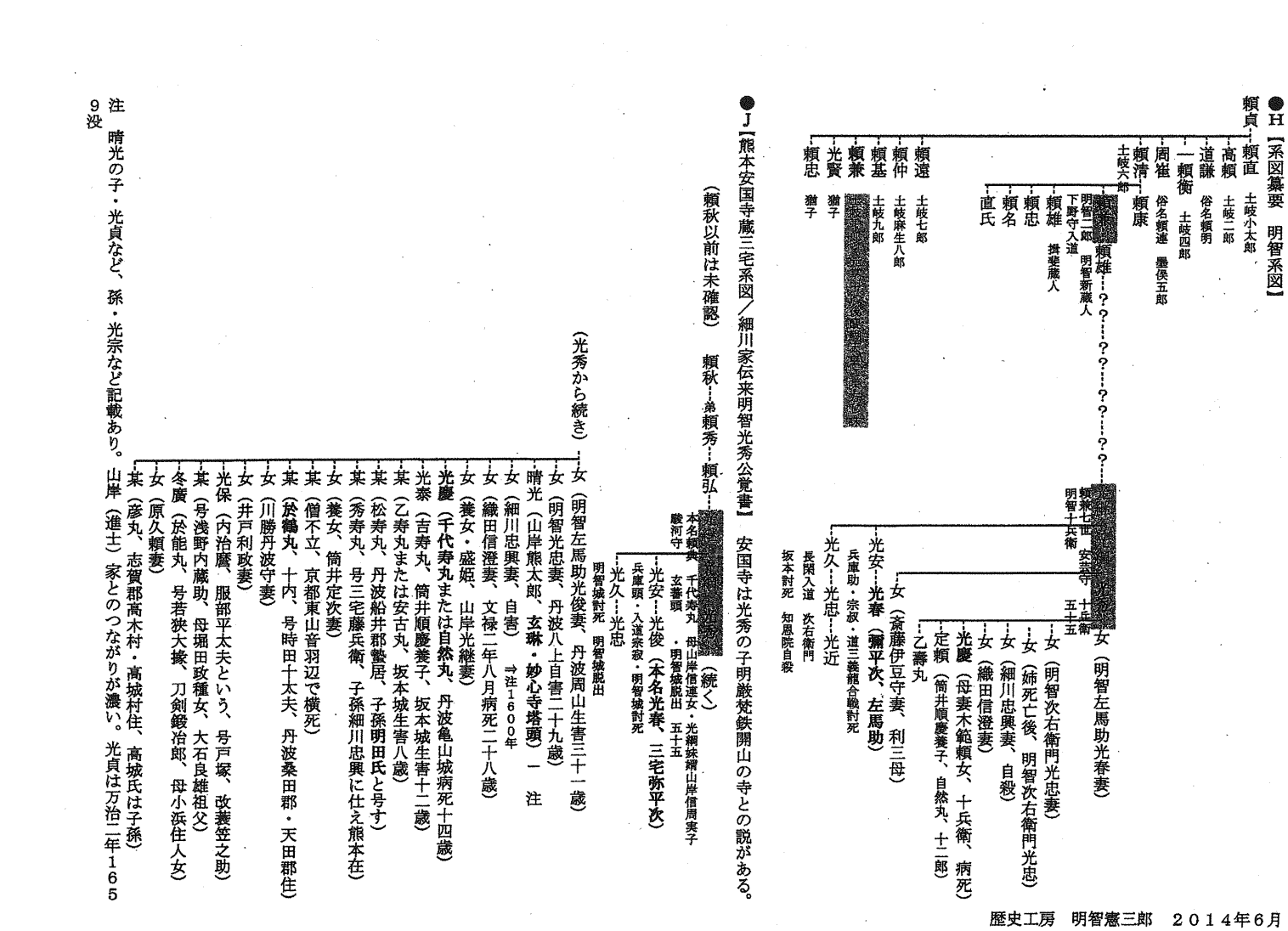
頼基…頼重…頼篤…國篤…頼秋…[illegible]…光國…光秀
異本に従うと下記になる。
十郎・文明時人

●G【続群書類従　巻第百二十八・系図部廿三　土岐系図（3）】

頼貞…頼清…頼康
土岐六郎
頼遠
土岐七郎
[illegible]
明智二郎・号下野入道・号明智
頼雄
頼世
康貞
直氏
頼明
法名道厳
[illegible]
土岐十郎・

歴史工房　明智憲三郎　2014年6月

●H【系図纂要　明智系図】



●J【熊本安国寺蔵三宅系図／細川家伝来明智光秀公覚書】　安国寺は光秀の子明厳梵鉄開山の寺との説がある。

注　晴光の子・光貞など、孫・光宗など記載あり。

●K【明智氏一族宮城家相伝系図書】　出口鉄三氏蔵、大正十二年四月謄写　国篤以降の説明が増加

注：東京大学史料編纂所のデータベースから入手可能

注1　頼秀の説明：十郎下野守　細川勝元からの文安四年・兵庫頭入道常秋救援命令奉書

注2　光俊の子・宗俊（三宅彌惣次　改宮城彌十郎）、孫・某（天正十六年生）

参考1.【明智軍記】　元禄六年（1693）刊行版が現存する初見。以下は文章より作図。

参考2.【土佐諸家系図】　注：東京大学史料編纂所のデータベースから入手可能

注：「以上は明智軍記ニ見タリ」の記述あり

戦国期幕府・美濃動乱の年表

歳は光秀の年齢(享年67歳)　　文頭の数字は月　　2014年10月　歴史工房　明智憲三郎

歳	西暦	和暦	幕府動乱	美濃動乱
	1477	文明　9	(足利義尚は文明5年から将軍)	?土岐成頼:足利義視・義材と美濃下国(応仁の乱の西軍の戦後処理)
	1479	11		2斎藤妙椿:可児郡明智に隠退
	1480	12	7玄宣政宣:連歌	2妙椿:没　5妙椿兄・利藤と妙椿養子・利国(妙純)相続争い、幕府は利藤を支持、守護成頼は利国支持　11利国:家宰石丸利光活躍で勝利、利藤は幕府が庇護
	1482	14	2明智玄宣政宣:連歌	
	1486	18	9玄宣政宣:連歌	
	1487	長享元年	10義尚:近江鉤陣、玄宣政宣・石谷兵部大輔など土岐氏14名:義尚と近江出陣(長享番帳)	
	1488	2	4政宣:連歌	
	1489	延徳元年	3義尚:陣中没　12玄宣政宣:連歌	?この頃、利藤:守護代へ復帰
	1490	2	3・7政宣:連歌	
	1492	明応元年		
	1493	2	4【明応の政変】足利義高:細川政元・伊勢氏に擁立される　6将軍義材京都脱出し越中へ	
	1494	3	1玄宣:連歌　12義高:将軍宣下	
	1495	4	3明智頼弘宛に義澄奉書「頼定・玄宣相論に和睦を命ずる」	6【船田合戦】斎藤妙純(土岐成頼長子・政房を擁す)対石丸利光・斎藤利藤(成頼次子・元頼を擁す)の船田合戦で美濃国内乱れる　7妙純勝利し利光は近江へ逃亡
	1496	5		5利光美濃侵入、妙純に敗れて自刃、元頼も切腹。石谷兵部少輔:元頼に殉ず、利光軍主軸の【土岐一族没落】　9妙純:近江へ出兵し六角攻め　12妙純:土一揆に敗れ自害し【斎藤一族壊滅】
	1497	6		4守護土岐成頼:没　6政房:元服し守護継承
	1498	7	9義材:越前朝倉氏へ、義尹に改名　10玄宣政宣:連歌	
	1499	8	11義尹(義材):坂本→周防大内氏	
	1500	9	7政宣:連歌	
	1501	文亀元年		
	1502	2	7義高:義澄に改名　8義澄:武田元信を相伴衆に要求、9政元:九条家から澄之を養子	4明智頼尚:病あり、頼典を義絶し、家督を頼明に譲る
	1503	3	3政元:阿波細川家から澄元を養子	
	1504	永正元年		
	1505	2	7政宣:連歌(残存する記録の最後)	
	1507	4	6澄之:政元を殺害。澄元に追放される 8高国:澄之を討つ　12義尹(義材):京都を目指す	
	1508	5	4高国:義尹と手を結び入京、義澄(義高):近江へ逃亡、澄元:三好之長と近江へ逃れる　6義尹(義材):大内義興と入京　7義尹(義材):将軍宣下、義澄:将軍解任	
	1509	6	5高国:三好之長破る	
	1511	8	8義澄の子義晴誕生。朽木稙満と播州へ。義澄(義高):近江岡山で没、澄元:高国に敗れ四国へ撤退	
	1513	10	11義尹(義材):義稙に改名	
1	1516	13	?明智光秀生誕	?明智光秀生誕
2	1517	14		12守護土岐政房:宿老斎藤利良に敗れる【美濃国内乱】
3	1518	15	8義稙(義材):大内義興帰国	7利良:政房・二郎を擁して斎藤一族と戦うも敗北し二郎と朝倉氏頼る　12幕府が二郎を参洛させるように朝倉氏へ命じる
4	1519	16		7政房:没、9利良:朝倉援軍と美濃に侵入し敗北(その後、幕府の援助で二郎が美濃へ戻り頼武と名乗って守護となる)
6	1521	大永元年	7高国:義晴を担ぎ入京 12義晴:将軍宣下、義稙:将軍解任	
8	1523	3	4義稙(義材):阿波で没	
9	1524	4	10高国:和泉国で細川元常に破れる	

戦国期幕府・美濃動乱の年表

10	1525	5		8土岐氏:斎藤氏!長井新左衛門尉(斎藤道三父?)ら長井氏により追放【美濃国内錯乱】
11	1526	6	6高国:細川尹賢の讒言で家臣香西元盛殺害	
12	1527	7	2義晴・高国:武田元光と近江へ逃亡　3義維(義澄二男、義稙養子):細川晴元らと堺着　10義晴:入京	
13	1528	享禄元年	9義晴:近江坂本→朽木谷へ	2幕府が二郎宛に命令発行(守護は頼武である)
16	1531	4	6高国:元長に敗れ自殺	
17	1532	天文元年	6晴元:元長を攻め自殺	
18	1533	2	4晴元:本願寺を破る	
19	1534	3	9義晴:入京、?義維:淡路に逃亡	
20	1535	4		?長井規秀(斎藤道三):頼武弟・土岐頼芸を担ぎ内乱(翌年にかけて)、頼武を追放して頼芸が守護となるその後、頼武派と結び朝倉氏などが介入
21	1536	5	3義藤(義晴の子):誕生、9晴元:入京	
22	1537	6	11覚慶(義晴の子):誕生	
23	1538	7	?義親(義維の子):誕生	
24	1539	8	1三好長慶:入京　6長慶:晴元・三好政長と対立	
26	1541	10	11義晴:に追われて近江へ	
27	1542	11	3義晴:帰京	
28	1543	12		頼武子・二郎(頼純):道三に敗れて越前へ(?)【大桑の戦い】
29	1544	13		9道三・頼芸:土岐二郎(頼純)・朝倉氏・織田氏を破る、その後も二郎・朝倉・織田の侵攻続く
31	1546	15	冬義藤:元服し将軍に	
32	1547	16	7義藤:晴元に敵対し坂本へ	夏土岐二郎・朝倉・織田:美濃侵攻、道三:二郎と和睦し婿とする　11土岐二郎:没(二十四歳)
33	1548	17	8長慶:晴元に背く　?義藤:晴元と和し帰京	
34	1549	18	6長慶:政長を討つ　?長慶:摂津江口で晴元を破り、畿内制圧、6義晴・義藤・晴元:近江坂本へ	
35	1550	19	5義晴:没 12義藤:三好長慶に攻められ晴元と坂本→朽木谷	10幕府:土岐氏宛に美濃国役の沙汰(頼芸が守護)
36	1551	20	7晴元:松永久秀に破れる	
37	1552	21	1義藤:帰京、晴元:若狭へ出奔	?道三:頼芸を国外へ追放、頼芸は六角、弟揖斐光親は朝倉を頼る (朝倉義景:足利義輝より偏諱を得て改名、朝倉軍の黒坂景久:加賀侵攻)
38	1553	22	2晴元:長慶に敗れる、3義藤:長慶に敵対、8義藤:近江へ逃亡	
39	1554	23	?義藤:義輝と改名	3道三:家督を子・利尚(義龍)へ譲る
40	1555	弘治元年		
41	1556	2	9細川藤孝:晴元らと坂本で連歌	4道三:義龍軍に破れ討死
43	1558	永禄元年	5義輝・晴元:朽木谷から坂本へ 11義輝:長慶と和睦し帰京	
46	1561	4	?晴元:長慶と和睦	
47	1562	5	9伊勢貞孝:三好氏に討たれる	
48	1563	6	3義輝:伊勢貞孝遺領を藤孝ら近臣へ配分、晴元:没　7藤孝:頼全・紹巴と連歌	(8朝倉軍:若狭侵攻を開始(永禄11年まで継続))
49	1564	7	7長慶:没	(9朝倉軍:加賀侵攻)
50	1565	8	5義輝:松永久秀・三好三人衆に暗殺 7覚慶(義昭):近江へ脱出　11松永久秀:三人衆と断交	(8朝倉軍:若狭侵攻)
51	1566	9	2覚慶:還俗し義秋と改名　8義秋:武田義統を頼り若狭⇒越前朝倉	(朝倉義景:足利義秋を越前にむかえる)
52	1567	10	1義親:義栄と改名　4三好義継:松永久秀と組み三人衆と敵対　11義栄:将軍宣下請うも成らず	(3朝倉軍:加賀一向一揆と戦う)
53	1568	11	2義栄:将軍宣下　4義秋:義昭に改名　9義昭:上洛、義栄:没　10義昭:将軍宣下　11光秀:藤孝・紹巴と連歌	(4朝倉館にて義秋元服し義昭n改名)

歳は光秀の年齢(享年67歳)　　文頭の数字は月

第４回
「戦乱を生き抜いた女性たち」

静岡大学名誉教授　小和田　哲男

１　はじめに

今もＮＨＫの大河ドラマの時代考証をやっているが、これまでも、1996 年の「秀吉」、2006 年の「功名が辻」、2009 年の「天・地・人」、2011 年の「江　姫たちの戦国」とやってきて、今年の「黒田官兵衛」で５回目になる。

今回は原作がなく、脚本家が一話、一話書いて制作するのでやりやすい。主に台詞の時代考証が多いが、現代と当時の常識のずれがあるので現代っぽい台詞をその時代にふさわしい言葉使いに直すのが仕事となる。

たとえば、2009 年の天地人の妻夫木聡扮する直江兼続が春日山城で酒盛りの時に部下たちに「越後は米どころ酒どころじゃ。じゃんじゃん飲め」と言う場面があったが、「じゃんじゃん」という言葉も引っかかったが、越後が米どころ、酒どころ、という点にも疑問を感じた。

確かに今では魚沼産のこしひかりも有名だし、酒好きの私にすれば新潟の酒たとえば久保田や八海山、君の井、〆張鶴、景虎など 10 くらいの名前が一度に出てくるが、これらの日本酒がおいしいと評判をとっているのは、一説によると田中角栄が出てきて宣伝をしてからだともいわれている。それまでは造り酒屋が小さかったこともあり、全国展開もしておらず、戦国時代には必ずしも越後が米どころや酒どころではなかったはずである。

大河ドラマの時間帯は小学生や中学生も見る。天下のＮＨＫが放送するわけで、時代考証もついているとなるとその放送が歴史の事実だということになる。しかしこちらの注文通りとなると固苦しくなっておもしろくなくなる。話をおもしろくするためにはフィクションは必要である。史実からは遠ざからないように、多少フィクションも交えながらという落としどころを探らなければならない。

そんな話の一つを紹介すると、織田信長の小谷城攻めで火の手の中をお市の方と浅井三姉妹が逃げ落ちるシーンを撮ることになった。しかし、滋賀のいろんな寺や城を焼き討ちした信長は小谷城を３年間攻め続けたが火はつけていない。発掘調査でも焼けた痕跡は見つかっていない。私の推論だが信長の妹お市の方とその娘たちのいる小谷城は焼き討ちにしなかったのではないか、と思う。そこで演出の方との交渉でちょっとだけという約束が番組では大々的に焼け落ちていた。

今年の大河ドラマ「官兵衛」の中で誉められた例を一つ紹介すると、「信長が宣教師からもらった地球儀にはオーストラリアが無かった。時代考証がしっかりされている」というコラムが載っていた。当時はまだオーストラリア大陸が発見されていなかったので事前に小道具さんにオーストラリアなしの地球儀を注文しておいた。

反対にクレームの例として黒田官兵衛が万吉と名乗っていた幼少の頃、母親の病気を治すために薬草を探しに行き敵に捕まるシーンがあった。龍野城の近くのある池の畔という設定でその池の名を勝手に龍神池として放送したところ、たつの市観光協会からクレームがきた。「視聴者から龍神池に関する質問やそこまでの道順を尋ねる電話が殺到して迷惑している」とのことであった。思いがけず迷惑をかけ、謝るしかなかった。

そこで、今日は戦乱を生き抜いた女性たちというテーマで話したい。江戸時代においては男子後継者無きはお家断絶というイメージが強いが、戦国時代はかならずしもそうではなく、女性が家督を継ぐということはいくつか行われていた。

２　家督を譲られた姫たち
女地頭の存在をどう考えるか

立花闇千代の例

大友宗麟の軍師立花道雪という武将は若い頃雷に打たれて足が萎えてしまったが、手輿を担がせて戦場に出て行ったという北九州の勇将である。その道雪に

は男児がなく、家督を娘の立花闇千代に譲りたいと大友宗麟に申請し、それに対する大友宗麟の許可証が残っている。その入り婿となったのが立花宗茂である。

井伊次郎法師の例

文書をみれば男としか思えないが、実は女性である。今の静岡県浜松市北区、昔の引佐郡引佐町の城主の井伊直盛に男児がいなかったので娘に家督を継がせ、直虎と名乗らせた。それが井伊次郎法師という女城主である。しかし、許嫁だった男性が今川氏に敵対して追われたため、その後も未婚のままだったが、その許嫁が他の女性に生ませた男児を引き取り後継者にした。それがのちに徳川四天王の一人と呼ばれた井伊直政である。のちの時代からみると中継ぎの形ではあるが、親から家督を継ぐという女権・人権が戦国時代には確立していたといえる。

（余談だが、以前から大河ドラマに出たがっていた落語家の春風亭昇太師匠が今回の大河ドラマ「黒田官兵衛」の中で、黒田長政の家臣の毛屋主水という武将に扮している。）

嫁入り時の「敷銭」とは

嫁入りの時の持参金だが家計に組み込まれない。万が一のための資金として持たされた金である。

たとえば、2006 年ＮＨＫの大河ドラマ「功名が辻」で仲間由紀恵扮する山内一豊の妻千代が鏡の裏から取り出した 10 両で山内一豊が名馬を求め、その名馬が織田信長の目にとまり出世の糸口となった、という有名な逸話もその典型であろう。

しかしこの物語によると、この馬は安土の馬市で求めたとあるが、天正 4 年、安土城築城当時の山内一豊の収入は今でいうと 2000 万円くらいである。それなら 1 頭 10 両＝100 万円の馬を求めるのは困難ではない。となるとあの話はそれより 4～5 年前、つまり長浜か岐阜時代の年収 400 万円の頃の話ではないか、とアドバイスをしたが、原作者の司馬遼太郎氏はすでに亡くなっており、原作を勝手には変えられないと断られたいきさつがある。

一般に、山内一豊の妻は「へそくり女房」といわれるがそうではない。この場合のように敷銭というのはへそくりではない。いざというときのための持参金であり、家計に組み込まれない妻独自の財産であった。

当時の宣教師のルイス・フロイスが日欧の文化比較を書き残している。ヨーロッパでは妻は財産を持っていないが、日本では妻は夫と別会計の財産を持っている。また、夫婦間で高利貸しも行っていたとある。

そして、離縁もあった。先日の大河ドラマでやっていたように黒田長政が蜂須賀小六の娘糸を離縁して家康の養女栄姫を迎えるなどということは当時では普通に行われていた。

そうした離縁などは、万が一の時の備えの意味合いもあった。

３　姫たちの結婚の意味するもの

女性大使としての側面

この言葉は作家の永井路子さんがよく使っていた。当時は政略結婚はあたり前であり、戦いの相手との手打ちの証として自分に近い身内で固めようとした。いわゆる平和の使者、友好の使者である。そして、敵地に一人で嫁いでいく辛さはあるが、何百、何千という家臣団あるいは、領民など多くの人の和平が保たれるという役割を自覚していたのではないか。

甲・駿・相三国同盟、つまり甲斐、駿河、相模の三国同盟が結ばれていた頃には、今川義元の娘から武田信玄の長男へ、武田信玄の娘が北条氏康の息子へ、北条氏康の娘が今川義元の長男へ嫁いでいる。そうすることによって今川は背後を気にせず西へ、つまり三河から尾張へ進出できたが結局桶狭間で信長に討たれることになる。武田は越後で上杉謙信と五回も戦った。北条は東や北へ、そして常陸まで出て行くことができた。

情報戦略上の役割

また、嫁ぎ先での情報収集という意味もある。たとえば　斎藤道三の娘、濃姫の場合であれば、嫁いでまもなく夜ごと出て行く信長を側室の所にでも行っているのかと不審に思い問い詰めた。すると、「稲葉山城から狼煙が上がると謀反の合図である」と斎藤道三の家来と示し合わせていたと言う。この情報を父道三へ通報し、道三はその家臣を殺したという逸話がある。清

洲城から稲葉山城の火は見えないので、これは実際は嘘だと思うがそういった情報戦略上の役割を担う側面もあった。

江の三度の結婚

大河ドラマ「江　姫たちの戦国」でおなじみの浅井三姉妹の江は最初、佐治一成へ嫁ぐが秀吉に敵対したために離縁され、次に秀吉の養子の秀勝と再婚するも秀勝は朝鮮出兵中に病死する。さらに家康の三男の秀忠に嫁ぎ、三代将軍家光を生んだ。このように夫の都合や兄の都合で結婚をさせられたり、破局を迎えたりして必ずしも夫と添い遂げる事ができなかった女性の姿が戦乱という時代をあらわしている。

４　嫁いでからの姫たち

夫婦の会話を史料から探る

徳川家康の家臣、本多正信から板倉勝重に京都所司代就任の内示が伝えられた。こうした昇進の内示を得た場合、本来は「ありがたき幸せ」となるはずだが、板倉勝重は「家に帰って妻と相談します」と返答したというエピソードが伝えられている。必ずしも「かかあ天下」という訳ではなく、夫婦が相談しあって物事を判断していたという風潮が戦国時代でもあった。

加賀前田利家と越中佐々成政は仲が悪かった。天正12年、小牧長久手の戦いは豊臣秀吉・前田利家連合軍と徳川家康・織田信雄・佐々成政連合軍の戦いであるが、その実、北陸版小牧長久手の戦いでもあった。そのときに前田利家が出陣に際して兵を募ったが思いのほか兵が集まらなかった。そのとき、妻のまつが金沢城の蔵から金銀の詰まった革袋を出してきて焦っている前田利家に対して「これ見たことか、普段から金を貯めるばかりでなく兵を養えと言っていたのにこのざまか。かくなる上は、この槍に金と銀を持たせて戦いに行ったらどうか。」と毒づく場面が大河ドラマでも見られたが、そんな逸話が「川角太閤記」に残されている。正式の文書では書かれないが、夫婦二人だけではこのような会話が交わされていた証拠で、このような武将クラスの夫婦の間でも対等の関係にあったと思われる。

狂言が物語る夫婦の実像

狂言の演目に「髭櫓」というものがある。

ある武士が殿様からお客を接待する役目を仰せつかった。引き受けて喜び勇んで帰って妻に報告したところ、妻曰く「その大事な接待の時のいい着物は殿からお借りできるのですか」と聞く。「みすぼらしい姿ではできない。自分で都合つけるのが当たり前だ」と返すと「そんなお金ありません、すぐにお役目を返上してきなさい」と妻が言返す。「金の都合つけるのが妻の役目ではないか」と勢いにまかせて妻に手を出すと、泣いて家を飛び出した妻が近所の奥方たちを呼び集めて逆襲に転じる。客の接待を仰せつかるほどの押し出しの立派なひげを蓄えていた夫をみんなで羽交い締めにして毛抜きでその自慢のひげを一本一本抜くという仕打ちに出る。

狂言とはいいながら、このように中・下級階級の武士の身分でも夫婦は対等な関係であり、決して夫の言いなりではなかった戦国の女性の実像が浮かび上がってくる。

「雌鳥歌えば家滅ぶ」といわれるのはいつからか

このような表現は「太平記」には出てくるが、それ以後しばらくは文献には出てこない。戦国時代の武将の妻の立場は現代でいえば企業の副社長クラスであり、夫婦で共同事業を進めていた側面があったと思う。それがまた、戦国時代末期、江戸時代に入った頃から見られるようになってきて、だんだん女性が政治の表舞台から排除されていったと思われる。

５　「銃後の守り」を超えた姫と妻たち

戦国合戦における姫と妻たちの働き

「銃後の守り」とは戦いの場面で女性の役割としてよく使われる表現であるが、戦国時代はかならずしもそうではない。

天正８年、今の沼津市の千本松原で武田勝頼と北条氏康との戦いが行われたが、その戦場跡の首塚で戦死者の遺体の発掘調査を東京大学教授鈴木尚先生が行った。その結果、約百体の人骨の三分の一が女性であり、その頭蓋骨の中には至近距離から鉄砲で撃たれている者もいた。

よく見る絵巻絵物や合戦図屏風では女性が戦っている姿は描かれていない。しかし、女兵士の資料もある。確かに野戦ではそうでなくても籠城戦では女性も一心同体で戦わざるを得なかったかも知れない。

いくつか例をあげると、前田利家の家臣奥村永福が妻とともに末森城に立て籠もり、そこを佐々成政が攻めたところ、落城寸前、奥村の妻が城内を走り回っておかゆを振る舞い兵士を元気づけ持ちこたえた、とある。

また、備中兵乱は三村元親と小早川隆景との戦いであるが、三村の妹は夫とともに戦い、戦意喪失した夫に対して妻が女性兵士を養成し、なぎなた集団を結成して奮戦している。そして最終的に全員殺されてしまうのだが、そうした事例が他にも結構ある。戦国という厳しい時代には女性も一人前の兵士として戦い、ひとりの人間として認められていた事実が浮き彫りになってくる。

戦いを回避させたこともあった

籠城などの戦いでは女性が和平交渉として出て行き、戦いを回避した例もある。

たとえば、大坂冬の陣において徳川家康の側室である阿茶の局や淀殿の妹の初（常高院　京極高次の妻）が和議のために奔走している。(これらは多分に家康に利用されたとも考えられるが)

また、伊達政宗の母つまり最上義光の妹の義姫は自ら輿に乗ったまま、伊達・最上の両軍の戦場の間に割って入って息子と兄の戦いを止めさせている。

後家役割と「女戦国大名」の登場

武将の妻たちは夫が亡くなると出家するのが常であった。その主な仕事は夫の菩提を弔うことと、子どもの養育である。普通は一人でその二つの仕事を行う。ところが、ある資料によると、秀吉の正室おね（北の政所あるいは高台院）に対して、茶々のことを「北のお方」と呼んでいるので茶々（淀殿）も二人目の正室ではないか、つまり関白になれば二人の正室をもってもよいという不文律があったのではないか、とも推測できる。そうすると、高台寺で菩提を弔うおねと、大坂城で秀頼の養育にあたる茶々というふうに一人の仕事を二人で分担していたというのが私の解釈である。

ところが子どもが幼い、あるいは病弱な場合、夫亡き後こどもをフォローするのが「女戦国大名」の登場と理解してよいと思う。

今川氏親の妻「寿桂尼」という女性は子どもの氏輝が 14 才で病弱であり、政治がとれない状況であった。そこで自ら家督を継いで 2 年間領国支配を行った、という文書が残っている。本来は重臣が支えるのだが、この場合はなぜか寿桂尼が前面に出てきている。今川家の家臣たちが編纂した「今川仮名目録」、つまり分国法を制定する際にも相談相手として寿桂尼が関わっていたのではないか、と私は解釈している。

女城主もいた。美濃岩村城の女城主で、信長のおばさんにあたり、遠山景任の妻である。(現在も城下の造り酒屋に「女城主」というお酒がある)

武田との戦いで夫が戦死。武田勢が城の奪取を画策し、武田の家臣の秋山虎繁が求婚するも織田の援軍がこない。仕方なく妻となるが　最終的に織田信長が攻め落とし、夫婦共々長良川で逆さ磔という不幸な結末を迎えることになった。

6　おわりに

丹波地域でいうと明智光秀の娘たちの動向が気になる

明智光秀には、有岡城の村木村重の息子村次に嫁いだ娘がいたが、村重が信長に対して謀反を起こし、光秀の説得にもかかわらず翻意しなかった。そのために離縁となり後に家臣に再婚させている。

また、玉は細川忠興に嫁いだが、信長お声掛かりの結婚であり簡単には離縁できない。　キリスト教に入信してガラシャとなるが、キリスト教禁止令が出たために味土野に幽閉。秀吉による探索のほとぼりがさめてから呼び戻した。

当時はキリスト教の影響が強く、高山右近のすすめで官兵衛もキリシタンになっていてその他何人もの武将が入信している。高山右近は九州攻めでバテレン追放令が出て、信仰をとるか、秀吉との主従関係をとるかを求められて信仰をとる。その結果、領地は没収され、前田利家が匿うが最後はマニラで没した。

官兵衛もバテレン追放令後も信教を捨てていない。

貝原益軒（養生訓で有名だが本来は医者ではなく儒学者）が編纂した「黒田家譜」にはキリシタンとは書かれていない。家康が慶長 18 年キリスト禁止令を出し、その後に出された本であり、キリシタンだったとは書けないが、実際は亡くなるまで信仰していてヨーロッパ側の文献にも博多の教会で盛大なキリスト教による葬儀が行われたと書いてある。

関ヶ原の前には長政の新しい嫁「栄姫」や細川ガラシャも大阪に住んでいた。次第に力をつけていた家康の会津攻めの際に石田三成は会津攻めに従った大名の妻子を人質に取るために大坂城に入るようにして、まず細川ガラシャに狙いを定めた。「夫の行動を拘束する事になるために動かない」として再三の説得にも従わなかった。三成が包囲して強引に連れ去ろうとしたが抵抗し、キリシタンのために自決できないガラシャは家臣の小笠原少斉に胸を突かせて死んでいった。そして、現在の大阪市博物館の南に越中井という井戸があるが細川越中守の屋敷から火が出て、大坂方が火事に気をとられている隙に監視の目がきつい隠れ家であった天満の屋敷にいた官兵衛の妻「光」と長政の妻「栄姫」は大坂脱出のきっかけをつかみ、無事、中津に帰る事ができた。そんないきさつもこれからテレビで放送するのでぜひ見ていただきたい。

～ 資料 ～

戦乱を生き抜いた女性たち

はじめに

１．父から家督を譲られた姫たち
「女地頭」の存在をどう考えるか
立花闇千代の例

井伊次郎法師の例

嫁入り時の「敷銭」とは

２．姫たちの結婚の意味するもの
女性大使としての側面

情報戦略上の役割

江の三度の結婚

３．嫁いでからの姫たち

夫婦の会話を史料から探る

狂言が物語る夫婦の実像

「雌鳥うたえば家滅ぶ」といわれるのはいつからか

４．「銃後の守り」を超えた姫と妻たち

戦国合戦における姫と妻たちの働き

戦いを回避させたこともあった

後家役割と「女戦国大名」の登場

おわりに

第５回
「戦国終焉の舞台」

歴史学者　渡邊　大門

はじめに

よく明智光秀は土岐明智氏の子孫といわれているが、さまざまな説がある。最近の研究によると、そうでもないという指摘があるくらいである。したがって、「時は今、・・・・・」という有名な本能寺の変、光秀決断の時の連歌の発句については、連歌の研究者から見直しがされており、これまでの解釈とは変わってきている。

近頃は戦国人気盛んで、ブームとなっている。1989年の大河ドラマ「春日局」では、春日局の出身地の黒井城周辺に幟がたくさん立っていた。しかし、翌年に行くと幟がボロボロになっており、ブームというのはなかなか続かないことを痛感した。

ところで、今年の大河ドラマ「軍師官兵衛」の配役は、織田信長が江口洋介、豊臣秀吉が竹中直人、徳川家康が寺尾聡、黒田官兵衛が岡田准一となっていて、天下人がずらりと並んでいる。岡田准一はほかにも時代劇などにも出ていて凛々しいなと思うし、期待の星でもある。ところで、大河ドラマはある程度の史実に基づいている反面、有名なエピソードを取り上げる必要もあり、間違いが少なからずある。

実は黒田官兵衛という人物については、貝原益軒という人物が17世紀初頭に『黒田家譜』という福岡藩の正史を書いている。福岡藩の藩主の命により書かれた歴代の藩主の伝記なので、黒田家にとって都合の悪いことは一切書かれていない。特に、藩祖というべき官兵衛については、最初から最後までいいことしか書いていない。

その他、いい加減なことも書かれていて少し割り引いて受け止める必要がある。今、テレビでも天下盗りを目論んでいるなどと描かれているが実際はそうでもない。映画や小説は史実とかけ離れたことが描かれていると思って楽しめばよい。そうした観点から勉強されたらいいのではないか。

戦国時代とは

戦国時代とよく言われるが、戦国時代とはいつから始まっているのかというと、実はよくわかっていない。何となく始まり、何となく終わり、50年くらいの幅がある。何を基準にするかは地域によって変わってくる。たとえば嘉吉元年、播磨、備前・美作の守護の赤松満祐が将軍足利義教を暗殺した有名な嘉吉の乱がある。そしてその義教の後継者が決まらないとか、幕府が赤松満祐を討つのにすごく時間がかかったりする。そのような状況の中で10年ごとにいろんな事件が起こる。15世紀半ば1440年代には、永享の乱において足利持氏が足利義教に討たれるなど、その頃から日本を揺るがす事件が起こりやすくなっていったのではないか。

嘉吉3年、禁闕の変が起こる。南朝の復興を図る残党勢力が御所を襲撃し、三種の神器のうち神璽を奪ってしまう、という大事件があった。天皇は三種の神器を持っていないと天皇の権威がなくなる。たとえば後醍醐天皇などは逃げる時に三種の神器を持って逃げている。平清盛のときの安徳天皇も三種の神器を持って逃げている。神器を持って逃げたのも、赤松満祐の陰謀と言われている。そういった物騒な世の中になってくる。関東では享徳3年に鎌倉幕府がほぼ滅亡状態になっていたが鎌倉幕府の鎌倉公方（関東の将軍）と上杉氏が仲が悪く、反目し合っている状態が続いていた。そして周りの武士達がそれぞれに加勢して対立する。30年以上揉めている。したがって関東では1454年の享徳5年からが戦国時代ととらえている人が多い。

京都御所を襲撃し北朝方から神璽を奪い吉野南朝の再興を果たそうとした1443年禁闕の変、その後の1457年の長禄の変では、赤松の遺臣が吉野の南朝方から神璽を持ち去り赤松再興を図るなどの混乱が続いた。もともと赤松氏は加賀、現在の石川県に領国をあてがわれて赴いたものの、地元勢力の富樫氏が阻止。地元勢力との争いの中で領国とは実力で勝ち取るものといった考えが身についたと思われる。

応仁・文明の乱

1467 年、応仁・文明の乱、その前の文政の変では管領家では斯波、畠山の家督争いが激しくなってきて、伊勢貞観という足利義政の側近が謀略事件を起こす。この頃から無茶苦茶な状態になる。この頃は将軍義政本人に自信がなく誰を家督にするかという決断ができないでいた。その後、実の息子が生まれてからはやはりその子に後を継がそうかとなったりして大混乱となった。

応仁・文明の乱勃発。テキスト的に言えば応仁・文明の乱の頃からが戦国時代となるのが自然な考え方である。戦いそのものは文明 9 年までの 11 年間争乱が続いた。戦争というのは誰でも嫌なものだが、1467 年から 3 年続いた争乱にみんな嫌気がさすのだがやめられないまま、管領家の斯波氏と畠山氏の争いが続く。どちらが家督を継ぐかはっきりしないまま戦争だけが続いていくわけである。そうした中で、応仁・文明の乱に乗じて赤松満祐がふたたび播磨の国を領地として切り従えていく。そのうちに山名氏の領地にも入っていったために争いをやめれば山名氏に返還を求められかねないのでズルズルと争いを続けていく。そうした中で、細川勝元、山名宗全が死ぬ。息子達が跡目を争い、その間、将軍という人たちは何の役にも立たない。実権を息子に将軍職を譲るが中途半端に口をはさみ、実権は譲らないままという状態が続いていくわけである。

明和 2 年、明応の政変で、管領の細川勝元が足利義材（義政の弟の子）を将軍職から辞めさせて堀越公方の足利政知の息子の足利義澄を将軍にするクーデターを起こす。この頃義材も義澄も 3 回 4 回と名前を変えているので大変ややこしい。

結局、1440～1490 年代くらいまでの 50 年間争いが続いたのを戦国の幕開けと考えてよい。関西、つまり兵庫県でいえば嘉吉の乱、関東でいえば享保の乱、全国的にいえば応仁・文明の乱の頃が戦国時代の発端といえる。

明応の政変は畿内・京都府への影響大きい。ここ丹波の国は京都に近い重要地域という認識が強い。

国人の台頭

しかし管領家の細川氏は京都で幕府を支えながら丹波と摂津という京に近い領地をしっかりと治めている。また、畠山氏は河内に本拠を構えているが、幕府の政治に関わっていると京都を離れられず、そうした状況下でやがて波多野氏や荻野氏などに領国を任せていると彼ら国人が台頭してきて次第に力が強くなっていき自立する。そうなると時間の経過とともに領主の細川氏などが手出しをしにくくなる状況が生まれていった。そうした身分の流動化が進み、やがて滋賀では佐々木道誉の系統の京極氏が多賀氏にかわり台頭する。美濃では土岐氏から斉藤氏へ、越前では斯波氏が朝倉氏に取って代わられることになる。

1394 年の南北朝の統一を経て 14～15 世紀半ばにかけて特定の家が継承してきたこれら守護職の伝統的支配が弱まっていき戦国大名の台頭が激しくなってくる。これが戦国時代の大きな特色といえる。

その戦国時代の寵児ともいえる代表例が豊臣秀吉であろう。百姓の出といわれているが本当はよくわからない。テレビなどでは竹中直人が演じていて明るくひょうきんなイメージを醸し出しているが、晩年の秀吉を見ていると本質は非常に怖い人だったのではないかと思う。

天皇家・公家の窮乏

こうして戦国時代に突入して室町幕府が衰退してくると、幕府からの金銭的支援を受けていた天皇家や公家では経済的余裕が無くなってきて、たとえば天皇家では即位式などの儀式ができない状態が生じる。また、譲位ができない天皇も出てきた。当時は一世一代制ではなく、上皇にいったん退いて若年の天皇に譲ることが普通に行われていた。つまり、戦争があったり、飢饉などの天災が続くと悪い節目（ムード）を変えるために改元することがよくあった。中華系の学問所の役人が中国の古典から二文字を選んで議論し決めるわけだが、この改元にも多くの時間と多額の費用がかかるためにおいそれとはできなくなってきた。このために文明は 18 年、永正は 18 年、天文は 23 年続いている。

たとえば先例に則ってやると費用かかるために天皇の葬儀ができず、数十日放置されているような記録が残っている。また、公家でも地方の荘園から上がってくるはずの年貢が上がってこない状態になる。たとえ

ば、丹波では大山荘には京都の東寺の荘園があるが、年貢が上がってこなくなる。そうなると自ら地方に下向して直接支配する場合もでてくるが、なかには源氏物語を書き写して地方に売りに行くケースも出てくる。清原教隆という人は越前一乗谷まで論語の講義に行き、連歌、和歌の会が開かれて収入を得ている。

ところで大河ドラマの中で黒田官兵衛が盛んに『孫子』や『三略』とか兵法の話をしている。勘兵衛は孫子や三略などの軍学書が読めたのだろうか。読めていないと思う。清原氏などは儒学を司る家だから先祖代々読み方を習っているから読めたわけで、あの時代、朝倉氏や他の大名たちが『源氏物語』を読んでいるが、中国の『論語』や『孫子』などの古典を読める人たちというのは相当な家柄であるといえる。

戦国大名畠山義総などは『源氏物語』によく親しみ、三条西実隆から写本を買ったり、彼の家臣が戦場から三条西実隆に質問の手紙を送るなど地方も源氏物語などの学問が広まっていた証拠である。したがって官兵衛が『孫子』について講義をするといっても、「孫子はこう言っていますよ」と説明し、「ああ、そうですか」といった程度ではなかったろうか。皮肉にも、戦国時代の影響で公家達が収入減から地方へ学問の指導に赴いたことにより学問の普及につながった。

鉄砲の出現

そして戦国時代の大きな特徴として戦い方の変化があげられる。鉄砲が入ってきたことで戦い方が革命的に変わった。以前の平安時代の白兵戦一騎打ちから弓矢・槍、そして鉄砲・槍に戦い方が変わってきた。それでも刀は最後のトドメを討つ為に必要で、相手の武将などの首級をとり兜とともに持って帰るための道具になる。ポルトガル商人が伝えた鉄砲であるが、それ以外にも様々な文物の輸入などヨーロッパとの交易が盛んになり、彼らの真の目的のキリスト教の布教も広がっていく。

しかし、一方で、戦国時代には実は多くの日本人が奴隷として売られている事実がある。
戦さが始まるとその後方から奴隷商人がついて行っている。そして強奪した金品の戦利品の中に捕虜がいるわけだが、その人たちが東南アジアやヨーロッパ、時には南米にまで奴隷として売られているという記録がたくさん残っている。このことも豊臣秀吉がキリスト教を禁止した理由の一つである。反面、徳川家康はこの人身売買を禁じることがなかったので、好戦的で強いといわれ、二束三文と安い日本人捕虜は貴重な戦力であったために海外各地へ売られていった。中には捕虜ではなく、自ら海外へ行くことを希望する者もいたり、航海途中で抜け出して行方知れずになる場合もあったようである。東南アジア、インド、南米で活躍している記録が残っている。

朝鮮出兵

天正 18 年で国内の戦争が終わる。日本国内の戦争がなくなれば分け与える領地がない。そこで秀吉は大陸に進出し、最終的には北京へ後陽成天皇を移すことも考えていたらしい。そのために朝鮮に道を貸してほしいという要請をしたが断られたが、秀吉は東南アジアにも目を向けていて台湾などへも盛んに書状を出し、配下になれと言っている。誇大妄想的になっていて、秀吉に言われて嫌々ながら戦っていたのが日本軍の実情ではないか。

それが文禄・慶長の役であり、朝鮮出兵による日本への連行が行われる。戦さにより田畑が荒れて食べていけないという日本国内の事情から労働力確保の必要性もあった。そして多くは陶工などの技術者で産業発展への寄与も目的としていた。ちなみに豆腐作りなども大陸から伝えられた物である。

その戦いの最中に朝鮮側に寝返った日本人も多くいた。朝鮮には鉄砲が無かったのでせっかくの戦利品の鉄砲の扱い方がわからない。そこで、官職を与える、あるいは高額の金を与えたり、妻をあてがったりして鉄砲の扱い方の指導にあたらせた。

関ヶ原の戦い

戦国時代の終焉については、だいたい天正元年、織田信長が足利義昭を追放して、室町幕府が倒れた後、織豊政権が始まった頃ではないか、という説もあるが、単なる幕府の瓦解と考える人もいる。

一方で天正 18 年小田原合戦、あるいは関ヶ原の戦いとさまざまな考え方がある。地域によって多少受け

止め方が違うが、関東であれば、今でいう神奈川、東京、千葉、埼玉、栃木、群馬までを影響下に置く大勢力であった小田原北条氏が滅亡した天正 18 年がその時期と考えられる。

また、関西であれば、慶長 5 年の関ヶ原の戦いであり、丹波では天正 7 年に八上城の荻野氏が光秀に滅ぼされた時であろうし、私の出身地の播州三木では天正 8 年別所氏の滅亡がその時といえると思う。

一つの考え方として、その土地の有力大名の滅亡が戦国時代の終わりと考えていいのではないか。その戦国の終焉と考えていい関ヶ原の戦いであるが、もともと家康と三成は言われるほど仲が悪かったわけではない。秀吉の七将のなかで三成の立場が悪くなり、諸武将から襲撃されたときにも家康が仲介に入って三成を引退させることで事をおさめている。秀吉は五大老に自分亡き後の秀頼のことを頼んで死んでいくのだが、その大老制度の崩壊こそが要因として大きい。

たとえば上杉景勝が家康の命による上洛に応じず、家康に討伐されそうになったり、前田利長が家康暗殺の嫌疑をかけられる。あるいは宇喜多秀家の家中で内紛があり家来が家康の元に逃げ込むようなことがあった。徳川家康は豊臣政権のために働いているのだが、結果的に五大老制度が崩れていくことになる。そのほかにも毛利輝元、安国寺恵瓊、石田三成の三者連合で家康に対抗するはずが輝元が翻意したために、前面に出ていた安国寺恵瓊、三成の破滅を招いた。悪いのは三成ではなく、輝元であると私は思っている。つまり黒田家の史書にもあるように生き延びればよく書いてもらえるが、滅びれば悪く書かれるのは仕方がないことである。

社会問題化した「浪人」

戦国が終わって平和になれば様々な問題が出てくるが、その一つが「浪人」の問題である。たとえば後藤又兵衛が黒田家を出奔し他家に仕官を働きかけるが、黒田家が裏から手を回して再就職の邪魔をする。関ヶ原以後、浪人が多く発生し、やっかいな存在として社会問題化していた。京の都へ出てきて武器を持ってうろうろする浪人を町衆も厭がっている。京都所司代に届け出て登録して住むことができるが、身分を町人、百姓に改めなければならない。後の大きな庄屋などで元武士であったというのはこうして帰農した家がそうである。

立花宗茂は九州柳川の領地を明け渡し京都に住み、伏見にいる家康に復活を願い出るが叶わなかった。その頃は自分の身の振り方について、案外楽観的に構えていた武将が多い。

宇喜多秀家しかり、長宗我部盛親も失脚後、寺子屋で子どもを教えたりしながら再起をめざし、家康への仲介を頼んだりしていたが叶わなかった。

そのころ、高野山で打倒徳川家康の戦略を練っていたかのようなイメージのある真田昌幸・幸村（信繁）父子も、実は金がないわびしい生活で望郷の思いを抱きつつ浪人生活を送っていたのが実情である。

豊臣家の滅亡

豊臣家はある意味、聖域であったが、慶長 8 年、徳川家康が征夷大将軍に任ぜられた時点で豊臣家との形勢逆転は明確になっていた。

ところで、「国家安康、君臣方略」の方広寺の梵鐘事件からはじまる様々な出来事から巷間よく言われるように家康は「たぬき」だったのだろうか。私はそうは思わない。徳川方は平和的解決の条件として豊臣家が一大名としての地位に甘んじることを求める。淀殿を江戸へ人質として差し出すこと、あるいは秀頼の大坂以外への領地替えである。それを拒否されたのでは他の大名に示しがつかない。調整役にあたっていた片桐且元も投げだした。

そうして起こったのが慶長 19 年の大坂冬の陣である。徳川方には多くの大名がついたが豊臣方は浪人ばかり。莫大な遺産があり、浪人に現金を与えるため、すぐに浪人が集まる。浪人の大坂城退去を要請しても拒否し、豊富な資金力で逆に人数が増えていく状況である。和睦後の堀を埋める約束についても全部埋めたので約束違反と言われているがそうではない。後年の編纂でいい加減に書き換えられている。こうなると徳川にすればどうしょうもなく、体面に傷がつく結果になる。

最終決戦の夏の陣であるが、冬の陣で持ちこたえたのは堀のおかげであるが、はたして真田幸村（信繁）

が構築して奮戦した堅固な惣構えの真田丸は本当に難攻不落の砦だったのか。

実は攻略難航の本当の理由は越前松平、加賀前田の連合軍の犯した失敗にある。

・大将の命令通り動く

・先駆けをしない

指揮命令系統（軍令）の徹底は戦いの鉄則である。だが功名を焦り、それぞれがわれ先に攻撃し軍令違反が続出した。後に彼ら自身が敗因を分析し検証している。

こうして戦国時代とは 15 世紀から始まり、最終的に関ヶ原の合戦および慶応 19･20 年の大坂の陣をもって戦国時代の終焉を迎えたといえるのではないか。

～資料～

丹波学「戦国終焉の舞台」

1　はじめに

・戦国ブーム――大河ドラマ、映画などの影響。**丹波では「春日局」（1989 年）。**

・今年は「軍師官兵衛」。ただし、特に後半部分などは脚色が多い。

・テレビドラマ、映画、小説などはあくまでフィクション。史実に忠実ではない。

・いったい戦国時代とはいつはじまったのか？　そのはじまりと終焉から考えてみたい。

2　戦国時代はいつはじまったのか

・そもそも戦国時代は、いつはじまったのか？　→何を基準にするかにより異なる。地域性も考慮。

・関西――嘉吉の乱（嘉吉元・1441）→　赤松満祐が将軍足利義教を斬殺。以降、応仁・文明の乱まで断続的に戦乱状態が続く（禁闕の変、長禄の変、文正の政変など）。

・関東――享徳の乱（享徳 3・1454～文明 14・1482）→　鎌倉公方と管領との戦い。

・全国――応仁・文明の乱（応仁元・1467～文明 9・1477）→　将軍家以下の諸国の大名が対立。

・畿内――明応の政変（明応 2・1493）→　管領・細川政元によるクーデター。足利義材（義稙、義視の子息）を廃し、足利義澄（政知の子息）を擁立。

・丹波国――京都に近い要衝の地。摂津などとともに細川氏が守護を務めた時代が長く、波多野氏ら配下の国人が存在。彼らがやがて徐々に自立し、戦国へと突入する。

3　身分流動化の時代

・鎌倉、南北朝期以来の名門大名の没落。→　同時に守護代、国人クラスの新興勢力が台頭。

・特殊な例として、豊臣秀吉のように一介の百姓身分の者が関白の座に座る。

4　天皇・公家の凋落

・天皇――即位式や葬儀などができなくなる。

・公家――地方に下向して、直接荘園支配を行うなどする。

・朝廷――朝儀（朝廷における年中行事が実行しにくくなる）。

→　改元なども困難になる。

・天皇家の収入――地方大名に官位を与えたり、書を与えたりし確保。

→　丹波山国荘などを保持し、禁裏御領として重要な収入源となる。

・公家の収入――地方大名に和歌・連歌を指導したり、写本を与えたりし確保。

・貧しいとはいえないが、本来の儀式などができず不便な状態。

5　ワールド・ワイドな時代へと突入

・キリスト教の布教が開始。→　同時に、ヨーロッパなどとの交易が開始。

・朝鮮出兵により、朝鮮半島から相当数の朝鮮人が日本にやってくる。

・南蛮商人が日本人奴隷を東南アジア、中国、イン

ド、ヨーロッパなどで売却する。

６　大戦争時代の終焉

・織田信長が将軍・足利義昭を追放した天正元年（1582）を室町幕府の崩壊、織豊政権の萌芽期と位置付ける（戦国時代と織豊時代の境目）。→　妥当な見解か？

・丹波では、天正７年（1578）の八上城の戦いをもって戦国が終わりを告げる。

・全国的には、天正１８年（1590）の小田原北条氏征伐をもって大戦争時代は終わる。

・その後、朝鮮半島に戦線を拡大。領土拡張を目論む（天皇などを中国へ移住させる計画など）。

・慶長３年（1598）に豊臣秀吉没。慶長５年に関ヶ原合戦。→　戦国の終焉にふさわしいか。

・慶長７年、八上城主前田茂勝が狂乱して家臣を斬殺。家は断絶。→　丹波における戦国終焉？

７　牢人たちの時代

・長い戦乱の中で、今川、武田、大内などの大名家から牢人が大量に発生。

・仕官できる者もあるが、そうでない者は各地を転々とするか、京都などに居つく。

→　関ヶ原合戦後は、徳川家康に面会を求め直訴しようとした。

・牢人は非常に厄介な存在であり、京都市中では監視の対象。→　身分の確定を迫られる。

・長宗我部盛親は大岩祐夢と名乗り、寺子屋を開きながら再起をうかがう。

・立花宗茂も京都で復活の機会を狙う。

・後藤又兵衛基次は、黒田長政の奉公構にあい再仕官が叶わず。

・真田昌幸は無念の死。子息・信繁（幸村）が遺志を継ぐ。

→　行き場を失った牢人たちが大坂城に結集。

８　戦国の終焉　―大坂の陣冬の陣・夏の陣―

・なぜ、大坂の陣は起こったのか？　徳川家康は、最初から豊臣家を滅ぼそうとしたのか？

→　「家康狸親父説」は、再検討の余地がある。

・関ヶ原合戦以降を経て、慶長８年に家康が征夷大将軍に就任すると、両者の立場は逆転する。

・戦いのきっかけは、慶長１９年の方広寺鐘銘事件（「国**家**安**康**」「君**臣豊**楽」）である。

→　家康の要求の中に、淀殿の江戸への人質と秀頼の大坂城退去があった。→　豊臣家は拒否。

・徳川方は大名主体の軍勢、豊臣方は牢人主体の軍勢。

・大坂冬の陣では、豊臣家が健闘。和睦に持ち込む。

→　堀の埋め立てについては、最初からの了解事項。

→　和睦が破綻したのは、豊臣方から牢人たちが撤収しなかったこと。

・徳川方は豊臣家を「一大名」として処遇したかった。

・元和元年（1615）５月、大坂落城。

・「元和偃武」。戦いの時代は終わり、徳川氏による本格的な全国支配が展開する。

９　おわりに

・戦国の始期は、地域により差異があるが、おおむね１５世紀半ば頃に求められる。

・戦国の周期も、地域により差異があるが、事実上は関ヶ原合戦。

〔参考文献〕

拙著『戦国誕生―中世日本が終焉するとき―』講談社現代新書・講談社（2011）、拙著『逃げる公家、媚びる公家―戦国時代の貧しい貴族たち―』柏書房（2011）、拙著『大坂落城　戦国終焉の舞台』角川選書・角川学芸出版（2012）、拙著『『戦国の貧乏天皇』柏書房（2012）、拙著『牢人たちの戦国時代』平凡社新書・平凡社（2014）、『人身売買・奴隷・拉致の日本史』柏書房（2014）など。

講師プロフィール

大村 拓生 氏（関西大学非常勤講師）

岡山大学文学部史学科卒業。大阪市立大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。専門は、日本中世史、畿内地域史。中世の流通や交通の研究において大きな功績がある。現在、関西大学非常勤講師。著書に『中世京都首都論』、共書に『中世文書論の視座』『都市－前近代都市論の射程－』がある。日本史研究会・大阪歴史学会・中世史研究会等に所属している。

福島 克彦 氏（大山崎町歴史資料館館長）

立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史、城と城下町の研究において大きな功績がある。現在、大山崎町歴史資料館館長。著書に『畿内・近国の戦国合戦』。主な論文に『織豊期における城郭・城下町の地域的展開』『城郭研究から見た山科寺内町』『明智光秀文書目録』等がある。

明智 憲三郎 氏（日本歴史学会会員、土岐会会員、情報システム学会員）

１９４７年生まれ。明智残党狩りの手を逃れた光秀の子・於雀丸（おづるまる）の子孫。慶応義塾大学大学院工学研究科修士課程修了後、大手電機メーカーに入社。一貫して情報システム分野で活躍する。長年の情報畑の経験を活かした「歴史捜査」を展開し、精力的に執筆、講演活動を行っている。本能寺の変の謎を「歴史捜査」で解明し、『本能寺の変　四二七年目の真実』（２００９年）『本能寺の変　４３１年目の真実』（２０１３年）を出版。

小和田 哲男 氏（静岡大学名誉教授）

静岡県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。２００９年まで静岡大学教育学部教授を務め、現在静岡大学名誉教授。ＮＨＫテレビ「歴史秘話ヒストリア」「高校講座日本史」などに現在も出演。分かりやすい解説には定評がある。ＮＨＫ大河ドラマ「秀吉」「功名が辻」「天地人」「江～姫たちの戦国～」「黒田官兵衛」などの時代考証も務める。ベストセラーとなった『日本の歴史がわかる本』や『春日局　知られざる実像』『国際情報人信長』『近江浅井氏』『桶狭間の戦い信長会心の奇襲作戦』『明智光秀～つくられた謀反人～』『北政所と淀殿－豊臣家を守ろうとした妻たち』『黒田官兵衛』等著書多数。

渡邊 大門 氏（歴史学者）

神奈川県生まれ。関西学院大学文学部卒業。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。戦国時代の研究においては、特に赤松氏、山名氏、宇喜多氏を手がけるほか、戦国大名全般にも詳しい。著書に『大阪落城　戦国終焉の舞台』『牢人たちの戦国時代』『黒田官兵衛　作られた軍師像』『黒田官兵衛・長政の野望　―もう一つの関ヶ原―』『信長政権―本能寺の変にその正体を見る―』等多数。

４　編集後記

平成２６年度の講座「丹波学」は、２００名を超える方々に受講していただき開講することができました。

本年度はテーマを「戦国の世と丹波Ⅱ～光秀と丹波～」として開講したことに依るところもあるのかもしれませんが、丹波地域のみならず京都府、滋賀県等々、遠方からも多くの方々に受講していただきました。改めて歴史ブームの大きさを痛感すると共に、丹波を中心としながら畿内一円の歴史に関心を持たれる人々が増えていくことは大変喜ばしいことであると思っています。

この講座「丹波学」は、平成８年度に兵庫丹波の伝統、文化、人物、言語などを総合的に考えていく「地域づくり」を目指した地域学の講座として始まりました。この「地域づくり」を進めていく上に置いても、先人達が「築いてきた世」、「歩んできた世」について「学び」「知り」「考える」ことは、単に歴史を学ぶだけではなく、今後我々が丹波の特色を生かしながら「築いていく世」、「歩んでいく世」、そして「後生に残していく世」について考える羅針盤となり、必要不可欠な事であると思います。

今年度の５回の講座では、前述しましたが「戦国、光秀、丹波」をキーワードに、中世日本史の歴史研究家として著名な先生方をお招きし、南北朝内乱期から明智光秀の丹波攻略、そして戦国終焉の舞台における戦国ロマン、人間模様を詳しくご講義いただきました。

受講生からは、「講師の先生方が素晴らしく、内容的にも満足のいくものでした。」「戦国期の丹波の歴史についてもっと知りたくなりました。」など、今後の学びの土台となるようなご意見をたくさんいただきました。こうした意見を参考にさせていただきながら、今後も受講いただく方々の満足とさらなる学びの向上心を醸成していただけるような内容を企画していきます。

この講座を受講していただいた方々が、新たな丹波地域の発展の原動力となられることと心より願っております。

平成２６年度講座「丹波学」講義録

平成２７年３月発行

発行　（公財）兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑　文化振興部

〒６６９－３３０９
丹波市柏原町柏原５６００
TEL　０７９５－７２－５１７０